

## 茶の湯銘事典 四(ひくを)

【ひくを】一声 ヒトコエ

① 鳥の一鳴。

② ほんの少しの声。一言。一曲。

季 ①春・夏 ②無季

類・初声・初音

連・時鳥・鶴

歌・夏の夜の臥すかとすれば時鳥鳴くひと声に明くる東雲

『古今集』紀貫之

・たづねつる宿は霞にうづもれて谷のうぐひすひとこゑぞする

『後拾遺集』藤原範永

・ありあけの月だにあれや郭公たゞひとこゑの行くかたも見む

『後拾遺集』藤原頼道

例\*《鶴の一声》胡銅花入。細首で五弁の膨らみがある。輪底は撥高台のよ  
うに高く波状紋がある。水府明德会蔵。

補初音、一声は特定の鳥に限定するものではないが歌語としての用例をみれば前者は鶯、後者は時鳥、鶴に用いられることが多い。②は①から派生した意味。特に、物事が決定する実力者の一言を鶴の一声という。

【びはかう】琵琶行 ビワコウ

① 琵琶の歌。白居易の詩題。『長恨歌』と並ぶ大作。

季 ①秋

同・琵琶引

連・感傷・左遷・琵琶・潯陽江

漢・琵琶行 並びに序

白居易

元和十年、予九江郡の司馬に左遷せらる。

明年の秋、客を湓浦の口に送り、舟船の中にて

夜琵琶を弾く者を聞く。其の音聞くに、錚錚然として京都の声有り。

『琵琶行』より

例\* 《潯陽江香合》鎌倉彫香合。琵琶行の故事に因み、舞台となった潯陽江の名がついたといわれている。松、酒甕、波などが彫られ謡曲『猩々』の意匠とも思われる。『猩々』も舞台は潯陽江である。畠山記念館蔵。同種の物が数あるようで、伊達家伝来の〈松島〉、根津美術館蔵〈猩々〉などが知られる。

補 元和十年(825)白居易は宰相武元衡を殺害した刺客を捕らえるよう強く請うたことが越権とされ江州(現在の江西省)潯陽江(九江)の司馬に左遷となった。翌年の秋、当地で客を送るために波止場まで行ったところ素晴らしい琵琶の音が聞こえてきた。それは田舎には似合わない都で通用する実力であった。演奏する者呼び問うと、元は長安の妓女で色衰えて商人の妻となり今は流浪の身という。わが身の上と照らして哀れに思った白居易は女に演奏を頼み、この出会いを詩にしようと約束する。酒を改め、悲しみを増す琵琶の音色に聞き入る白居易は涙を流し感傷に浸る。六百二十六言もの大作。琵琶は東洋の古典弦楽器。西アジア起源という。茄子形の胴に首が細く四弦が多い。腕に抱え撥で奏でる。正倉院には四弦琵琶が四面、珍しい五弦の琵琶が一面現存する。茶の湯の世界には「琵琶床」(本床の脇の板敷き半畳の狭い床)、「琵琶杖」(突き上げ窓の戸を開ける際戸を支える棒。)など琵琶の付く用語がある。このほか琵琶に関わるものに琵琶湖、弁才天、琵琶法師、謡曲『弦上』『蟬丸』『千手』『経政』などがある。国宝源氏物語絵巻(宿木三)には中君の前で琵琶を弾く勾宮の姿が描かれている。

【つむろ】氷室 ヒムロ

- ① 氷を夏まで貯蔵しておく室。
- ② 能の曲名。宮増作。脇能物。荒神物。丹波国を舞台とする。亀山院の臣下が氷室山に赴くと氷室守の老人が現れ、夏でも氷が解けないのは大君の徳のためだと語る。夜になると天女が舞い、氷室の神が現れ氷を守護し都へ送り届ける。

季 ①②夏

類・氷室の朔日・氷室の節句

連・氷・木陰・涼

曲・青葉の木蔭分け過ぎて 雲路の末の程もなく 都に近き丹波路や 氷室山にも着きにけり  
『氷室』より

歌・春秋ものちのかたみはなきものを氷室ぞ冬のなごりなりける

『千載集』覚性法親王

・青霞原嵐ひまなし氷室より氷積みたる車は行くも

『氷魚』島木赤彦

例\*菓子の銘。葛饅頭を山形にし、羊羹や白餡を氷に見立てたもの。

補 昔は気温の低い山に穴を掘り氷を貯蔵した。最古の記録は『日本書紀』仁徳六十二年にある。平安時代、宮中用の氷室は畿内に数箇所あったらしい。

氷室遺跡は近畿地方に確認でき、氷室山の地名は現在でも各地に残る。『主水司式』には十個所の氷室があげられ先載の謡曲の舞台、丹波国桑田郡ももいりのみさしき記されている。宮中では毎年陰暦六月一日に氷室の氷を諸公に下賜したらしく、この日を氷室の朔日、氷室の節句などと呼んでいた。これは夏に対処する御祓いの意味を持っていた。民間でも宮中に習い、厄除けの意味を込めて氷の代わりに餅など白い菓子を食するようになった。今日でもその風習を伝え、六月一日に白い菓子を食する地域がある。

【つらやま】 広沢 ヒロサワ

① 広沢の池の略。山城の国の歌枕。現代の京都市右京区嵯峨広沢町。遍照寺南麓、大覚寺・大沢の池の東に位置する。周囲一・三km。平安時代後期より月の名所として知られる。

季 ①秋

同・広沢の池・遍照寺池

連・月見(観月)・嵯峨野・遍照寺・大覚寺

文・あるいは白浦、吹上、和歌の浦、住吉、難波、高砂の尾上の月のあけぼのを、ながめて帰る人もあり。旧都にのこる人々は、伏見、広沢の月を見る。

『平家物語』巻五より

歌・広沢の池にうかべる白雲は底吹く風の浪にぞありける

『重之集』より

・いにしへの人はみぎはにかけ絶えて月のみ澄める広沢の池

『頼政集』より

・更級も明石もここにさそひ来て月の光は広沢の池

『六百番歌合』慈円

例\*瀬戸金華山窯茶入。広沢手本歌。北村美術館蔵。「広沢の池の面に身をなして見る人もなき秋のよの月」の歌(一説に『互室集』読み人知らず)に因む。牙蓋裏銀は月に因む。\*志野茶碗。旧赤星家、鈍翁所持。現在湯木美術館蔵。\*《広沢切》伏見天皇の御製歌。元は卷子本。

補 広沢の池は灌漑の溜池であり自然の池ではない。『続日本紀』宝亀七年(773)には秦氏の支族が朝原氏と称しこの地を開拓したことが記されている。その頃既に、溜池は造られていたものかもしれない。宇多法皇の孫、寛朝僧正が勅によりこの地に遍照寺を開いたのは永祚元年(989)。当初は池の北西・朝原山(遍照寺山)の南麓に位置した。池は寺の建立に伴い溜池の機能を離れ造園化が進み、池の畔には月見堂・釣堂・潜竜亭(大覚寺の観月所)が設けられ西岸付近の観音島には橋が架けられたという。『六百番歌合』に「広沢池眺望」の題があり鎌倉時代初期には歌枕となっていたようだ。鎌倉時代後期から一時荒廃し、現在の寺は池の南に再建されたものである。漢詩や瀟湘八景のひとつ「洞庭秋月」の影響か、「月の顔見るは、忌むこと」(『竹取物語』十九)という風習からか、観月に水に映して眺める風習があり、広沢の池のように月の名所は池・海など水辺である場合が多い。松尾芭蕉の「名月や池をめぐりて夜もすがら」の句も他の池を詠んだものではあるが月と池との相性が広沢の池同様に効いている。

【ふゆいもり】冬籠 フユゴモリ

① 冬、動物に限らず人間も野外で活発な活動をせず家に籠ってしまふこと。雪に閉ざされ生活すること。

② 「春」にかかる枕詞。古く万葉時代は②の意味として用いられている。

季 ①冬 ②春

こもり

同・冬木成・冬隠

連・雪国・囲炉裏・吹雪・寒月

歌・冬こもり春の大野を焼く人は焼き足らねかも我が心焼く

『万葉集』 作者未詳

・雪ふれば冬こもりせる草も木も春に知られぬ花ぞ咲きける

『古今集』 紀貫之

・冬ごもる病の床のガラス戸の曇りぬぐへば足袋干せる見ゆ

正岡子規

句・鍋敷に山家集あり冬籠り

与謝蕪村

補 ①は平安時代以降の意味で古く万葉時代は②。なぜ春に掛かるのか納得できる説は見当たらない。「冬木成」の字を手掛りにあえて訳せば「冬木立に芽が吹く春」という意味になるうか。俳句の季語は冬。寒月は寒々とした月の光と、寒い頃という意味がある。

【ふらうもん】 不老門 フロウモン

① 中国は洛陽の宮門の一つ。

② 平安京大内裏の豊楽院、江戸城などの①に倣い名付けられた門。

季 ①②無季

連・長生殿・日月遅し・長寿

漢・長生殿の裏には春秋富めり 不老門の前には日月遅し 保胤

『和漢朗詠集』 祝より

文・咸陽宮と申すは、都のまはり一万里。内裏は地の上三里。高う筑きあげて、長生殿あり、不老門あり。金をもつて日をつくり、銀をもつて月をつくれり。

『平家物語』 卷五より

曲・それ青陽の春になれば 四季の節会の事始め 不老門にて日月の光を天子の勸覧にて 百官卿相に至るまで 袖を連らね踵を継いで その数一億百餘人 押を奏せられうずるにて候

『鶴亀』より

補 洛陽は夏王朝末期の都となつて以来、都あるいは副都として繁栄を続けた古都。わが国では遠き中国の古都への憧れと名称から栄華、長寿を象徴する門として知られ謡曲『邯鄲』など、しばしば先載の漢詩が引用される。先載の『平家物語』にある咸陽宮は秦の都であり時代が合わないが長生殿、不老門は中国の都を象徴する建物として登場する。

【ほづいらい】 蓬萊 ホウライ

① 中国神仙思想に説かれた仙山。山東半島の東方渤海の海中にあり、仙人が住む不老不死の靈山、あるいはその山にある仙人の宮殿。方丈・瀛州ほうじょう えいしゅうと共に三神山に数えられ、西方の崑崙山に対峙する東方の仙山である。

② 唐時代、高宗皇帝が建てた宮殿。蓬萊宮のこと。

③ 蓬萊飾のこと。蓬萊山・蓬萊盤・蓬萊台ともいう。蓬萊山になぞらえた祝儀の飾物。主に新年に用いることで知られている。飾り方には多様な様式があるが、三方の上に白紙・羊齒・昆布・のし鮑・柑橘類・米・餅などをのせ床に飾るのが一般的である。

季 ①②無季 ③新年

類・蓬萊山・蓬萊宮・蓬萊島・蓬ヶ嶋

連・不老長寿・鶴・亀

漢・蓋けだしかつて至れる者有り。諸々の仙人及び不死の薬皆ここに在り。其の物禽獸きんじゅうことごとく白くして、黄金・銀を宮闕きやうけつを為す。未だ至らずして之を望めば雲の如く。至るに及びて三神山かへって水下に居り。之に臨めば風すなはち引き去る。終に能くよ至るものなしと伝ふ。

『史記』封禪書より

文・くらもちの皇子には東の海に蓬萊といふ山あるなり。それに、銀を根とし、金を茎とし、白き玉を実として立てる木あり。それ一枝折りて賜はらむ。

『竹取物語』より

曲・池の汀の鶴亀は 蓬萊山もよそならず 君の恵みはありがたや

『鶴亀』より

例\*大井戸茶碗。藤田美術館蔵。武野紹鷗、今井宗久所持。近衛尚嗣の銘か。  
\*青井戸茶碗。片桐石州箱。滴翠美術館蔵。\*《蓬萊切》伝藤原行成筆。『拾遺集』などより賀の歌五首を写したのもの。もとは巻物であったようだが現在は一首ずつの歌切。\*《蓬萊山莊》茶家での呼び方で、床に飾った鏡餅莊。補蓬萊・蓬萊山を異称とする地は多く、富士山・熊野・熱田神宮・江戸城・宮城県などがある。蓬萊山飾は長寿を祝うところから不老不死の仙山の名が付いたと思われる。

【ほたる】 螢 ホタル

① 甲虫目ホタル科の昆虫。体長1cm前後。成虫は水辺・河岸の草叢に住む。多くは腹部端に発光器を持ち交尾期の夜点滅する。幼虫は水中・湿地に住む。ゲンジボタル・ヘイケボタル・ヒメボタルなどの種類がある。

② 「ほのか」に掛かる枕詞。

③ 紫式部『源氏物語』巻二十五の巻名。光源氏三十六歳五月。玉鬘は養父である源氏と源氏の弟、兵部卿宮との間で悩み苦しむ。源氏は玉鬘を思いつつ養父として宮との交際を勧める。宮が玉鬘を訪れているとき、源氏は玉鬘の周りに螢を放ち、宮に美しい玉鬘の姿を見せる。長雨の頃、物語に熱中していた玉鬘に源氏は物語の虚構にこそ真実があると物語の本質を説く。

④ 消えかかった火。埋火のこと。また、萁盆の火を螢火ともいう。

季 ①③夏 ②④無季

連・螢狩り・螢売り・螢舟・露・学問

漢・明々としてなほ在り 誰か月の光を屋上に追はむ 皓々として消えずあに

雪片を床の頭に積まむや 秋の螢帙を照らす賦紀 『和漢朗詠集』螢より

文・夏は夜。月のころはさやなり、闇もなほ螢のおほく飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。  
『枕草子』一より

曲・沈みしは水の青き鬼 われは貴船の川瀬の螢火 『鉄輪』より

歌・もの思へば沢の螢もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る

『後拾遺集』和泉式部

・夕されば螢よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき

『古今集』紀友則

・いさり火の昔の光ほの見えて蘆屋の里に飛ぶ螢かな

『新古今集』藤原良経

句・狩衣の袖のうら這ふ螢かな

与謝蕪村

詩・ほほほたるこい あつちの水は苦いぞ こつちの水は甘いぞ ほほほたる  
ほほほたるこい 『ほたるこい』わらべ歌

例\*名物。瀬戸春慶瓢箪茶入。上田宗古所持。鴻池家伝来。遠州銘命。\*中興名物。瀬戸春慶茶入。小堀遠州所持。\*《螢籠炭斗》円能斎好炭斗籠。一

瀬小兵衛造。淡々斎の好み直したものもある。\*《螢手》明代の磁器の透明感のある薄手作りによる文様。薄手の部分が光を通し文様が浮き出る。

**補** ほたるの語源は「火垂る」<sup>ほた</sup>「火照り」<sup>ほて</sup>であるという。螢は先載のように神代には混沌とした世界の怪しい光として畏れられていた。古代人の光り輝くものに対する畏敬の念は当然の心情であろう。やがて先載の様に燃える思いにたとえられ恋歌に詠み込まれたり、時には死者の靈魂にたとえられたりすることもあった。以降、中古より現代に至るまで夏の代表的景物となる。また、晋の車胤と孫康の故事より「螢雪の功」として苦学をたたえる象徴でもある。

【ほととぎす】時鳥 ホトトギス

① カッコウ科の鳥。全長二十八cm、背は灰褐色、腹は白に横縞。カッコウに似ているがより小さい。五月頃に日本に渡来し八月か九月に南方へ帰る。ウグイス・ミンサザイなど他種の鳥の巢に卵を産み育てさせる托卵により繁殖する。「キョツキョツキョツ」という鳴き声を、昔は時鳥の鳴き声を「シデノタオサ」「テツペンカケタカ」と聞き取り、最近では「特許許可局」という聞きなしを持つ。春の鶯・秋の月・冬の雪に並び夏を代表する歌題である。

季 ①夏

同・郭公・杜鵑・子規・不如帰

連・田植・一声・落し文・忍び音

文・郭公は、猶さらにいふべきかたなし。いつしかしたり顔にも聞えたるに、卯花、花橘などにやどりをして、はたかくれたるも、ねたげなる心ばへ也。

『枕草子』三十九より

・春は霞、夏は青葉がくれの時鳥、秋はいと淋しきまざる夕の空、冬は雪の暁、

小堀遠州『書捨文』より

歌・わがやどの池の藤波さきにけり山郭公いつか来鳴かむ

『古今集』よみ人知らず

・時鳥鳴きつる方を眺むればただ有明の月ぞ残れる

『千載集』藤原実定

・さやかに鳴きわたる哉ほととぎすなれや五月の光なるらん

『長秋詠藻』藤原俊成

・死出の山越えて来つらむほととぎす恋しき人のうえへ語らなむ

『拾遺集』伊勢

句・目には青葉山ほととぎすはつ鱈

山口素堂

詩・卯の花の匂う垣根に 時鳥はやも来鳴きて 忍び音もらす夏は来ぬ

『夏は来ぬ』佐佐木信綱

例\*茶花。ユリ科の多年草。九月十月に花を咲かす。

補 歌題の鳥として時鳥は春の鶯、秋の雁と並び賞され、先載の歌のように俊成をして「五月の光」とまで賛えられるほど好まれた鳥である。こうした時鳥の魅力は単なる鶯との対比に留まらない特異な背景がある。時鳥のイメージは光と闇とが交錯する。『古今集』夏歌の三十四首のうち二十八首にも時鳥が詠まれている。これらは初夏の爽やかな風物詩として時鳥のいわば陽の面を称賛した歌である。しかし、陰の部分に眼をやると時鳥のイメージは極めて彫りの深いものとなる。時鳥は渡り鳥であるが田植の時期に山からやって来るものと思われていた。この鳥が冥途の鳥といわれてきたのも、山、即ち祖先の霊の住む世界からやって来るといふ通念に因る。身近に鳴き声を聞きながらも容易に姿を見せないこの鳥の習性に適う解釈である。多くの鳥がそうであるように「ホトトギス」も鳴き声から生じた呼び名であろうが、時鳥に限り鳴くことを「自分の名を」名のとったのは冥途を渡る鳥としての神聖視した結果であろう。「いくばくの田を作ればか時鳥しでの田長を朝な朝な呼ぶ」という藤原敏行の歌は『古今集』の夏歌からはずれ雑躰に属する。「シデノタヲサ」という不可思議な言葉が見られるが、元々鳴き声を表した音に漢字が当てられ音が調い、新たに意味が付着したものと思われる。「タヲサ」は田植の時候に飛来する鳥であることから「田長」の字が当てられ、田植を督促する鳥という意味を生んだ。「しで」は意味不明で地名ではないかともいわれている。「賤」「死出」などの字が当てられた。「死出」はあまりに印象の強い言葉だが、祖霊の住む山から飛来することからの連想であろう。このため、先載の伊勢の歌のように死出の山、即ちあの世を渡って来た鳥として時鳥は死者への懐旧を呼び覚ます。あの世とこの世を越えて飛来する鳥は陰と陽のイメージを合わせ持つ。「五月の光」であると同時に夜も鳴く闇の鳥でも

ある。清少納言は「夜まさりするもの(夜にこそ真価を發揮するもの)」「に時鳥をあげている。「ほととぎす鶯に劣るといふ人こそ、いとつらう、憎れ」というまでに時鳥鬚眉の彼女は夜と時鳥の相性に底知れぬ魅力を感じていたのである。ちなみに中国では臣人の妻と通じた蜀の望帝の霊とされ時鳥は嫌われる。この負のイメージは托卵のためであろうか。しかし、わが国では陰にも陽にも働きながら不吉と嫌われることはほとんどない。近代俳壇に大きな影響を与えた雑誌『ホトトギス』は正岡子規主宰。虚子・碧梧桐・鬼城・蛇笏・秋桜子・誓子・草田男らの同人を輩出。勿論「子規」も時鳥を意味する。唱歌『夏は来ぬ』の作詞は佐佐木信綱。忍び音とは時鳥の初音をいう。小説『不如帰』は徳富蘆花の代表作。どうやら時鳥は中世から近代へも飛来し鳴きつづけているようだ。

【まがき】籬 マガキ

① 竹や柴、葦を組んだ垣根。玉垣が御所や神社などを神聖な所として囲う立派な垣根をいうのに対して籬は素朴な垣根をいう。

季 ①無季

同・間垣・笹・垣根・透垣

類・菊籬・卯の花垣

連・籬島・東籬採菊

漢・飲酒 其五 陶淵明

籬を結びて人境に在り(略)菊を采る東籬の下 悠然として南山を見る  
山気日夕に佳なり 飛鳥相与に還る…

文・月やうく出でて、荒れたる籬の程うとましくうちながめ給ふに、琴そゝのかされて、ほのかに搔き鳴らし給ほど、けしうはあらず。

『源氏物語』末摘花より

文・庭の千種露おもく、籬にたふれかゝりつゝ、そともの小田も水こえて、鳴たつひまも見えわかず。

『平家物語』灌頂卷より

曲・甕の竹葉は陰や緑を重ぬらん 其外籬の荻花は 林葉の秋を汲むなりや

『養老』より

歌・我妹子がやどのまがきを見に行かばけだし門より返してむかも

例\* 《籬菊螺鈿蒔絵硯箱》被せ蓋造り。国宝。鎌倉時代。鶴岡八幡蔵。《籬菊蒔絵手箱》室町時代。熊野速玉大社蔵。\* 《籬花》彫三島茶碗。内側に桧垣紋、花紋を配し外側は桧垣紋となっている。松浦家伝来。\* 《芭》不昧所持。独楽棗。畠山記念館蔵。なお、これを本歌とし不昧は七つ長棗を作っている。補歌語として登場する籬は普通共に植えられ一体化している植物が詠まれている。菊、山吹、卯の花などがその代表である。特に菊の添う籬を菊籬、或いは先載の陶淵明の詩に因み東籬採菊とうりさいきくといい、画題、蒔絵の意匠にもなっている。鎌倉室町時代に菊籬の意匠は蒔絵の世界で流行し先載の《籬菊螺鈿蒔絵硯箱》はその代表である。徳川美術館蔵〈源氏物語絵巻 橋姫〉には青竹を編んだ透垣の蔭から薫が大君、中君姉妹の姿を垣間見る場面が描かれている。藤田美術館蔵「柴門新月図」は室町時代初期詩画軸の代表であるが、草葺の門の左右に連なって花を伴わない素朴な風情の籬が描がれている。当時の様を知る資料となろう。茶道具には蒔絵香合に菊籬の意匠が見られるがその他、陶器の菓子皿に花を描かず籬だけを縦横の線のみで簡素に描いたものがある。この上に菊形の菓子乗せれば菊籬となり、卯の花形の菓子乗せれば卯の花垣として楽しめる。気の利いた意匠といえよう。

【まやう】 真砂 マサゴ

① 細かい砂。数限りないことの喩えとして長命を祝す歌によく用いられる。

季 ① 慶事

同・なまご・いさご・ますなご

類・真砂の金・真砂路・高真砂

連・長寿・祝賀・君が代

文・浜の真砂の数多く積もりぬれば、今は飛鳥川の瀬になる恨みも聞えず、さ  
ざれ石の巖となる喜びのみぞあるべき。 『古今集』 仮名序より

歌・君が代はかぎりもあらし長浜のまさごの数はやみつくすとも

『古今集』 神あそびのうた

・万代をかぞへむものは紀の国の千尋の浜のまさごなりけり

『後拾遺集』 清原元輔

補 『法華経』などの經典に無数の数を表すのに「恒沙の如く」すなわち「ガ  
ンジス河の砂の数のように」という表現が見られるが真砂もその影響を受け  
た言葉ではないだろうか。「真砂の金」とは金は砂に混じっても価値は変わ  
らぬことから、高貴な人は如何なる場でも卑しくはならないという喩え。

【まつかぜ】 松風 マツカゼ

① 松の梢を吹き抜ける風。及びその風音。  
② 茶釜のたぎる音。釜音。①の音に似ているところからついた名称。  
③ 『源氏物語』巻十八の巻名。源氏三十一歳の秋。源氏の勧めにもかかわら  
ず明石の君は身分の低さに悩み上洛をためらう。明石の入道はそんな娘のた  
めに大堰の河畔に家族と共に住めるよう邸を入手した。源氏も邸の整備に協  
力する。しばらく紫の上に遠慮していた源氏はようやく大堰の明石の君のも  
とを訪れる。そこで初めて幼い姫君と対面する。

④ 能の曲名。世阿弥改作。及びそのシテの名。須磨の浦の松にまつわる物語。  
月の美しい秋の夜、ある旅の僧が須磨の浦で由来ありげな松の木を見つけた。  
里人に尋ねれば、その松は今亡き松風・村雨という姉妹の旧跡であるとい  
う。その松に念仏を唱え、僧は宿を求めて付近の塩屋に立ち寄り、主の帰り  
を待つ。月明かりの中、二人の海女姉妹が帰ってくる。宿りを許された僧は  
姉妹に松の旧跡を弔ったことを話す。姉妹は涙し、実は自分達は在原行平に  
寵愛を受けた松風・村雨の亡霊であると告げ亡き行平への恋慕の念、月を友  
とし潮汲みの苦勞に耐えてきた身の上を語る。語るにつれて松風の霊は思い  
余って行平の形見の烏帽子・狩衣を身に纏い舞う。須磨の浦の波は荒れ姉妹  
の亡霊は回向を乞い暁とともに消えてゆく。後載『古今集』行平の歌や『源  
氏物語』須磨の巻を出典とし、月・海・松を景物とする。面は・シテ(ツレ)Ⅱ  
小面 若女 孫次郎。

季 ①②無季 ③④秋

同・松籟・松の嵐

連・月・村雨・須磨・汐汲・烏帽子・颯颯・鹽屋・藻鹽・琴の音・塩  
漢・溪廻り松風長し 蒼鼠古瓦に竄る 知らず何王の殿ぞ遺構絶壁の下

杜甫『玉華宮』より

曲・夢も跡なく夜も明けて 村雨と聞きしも今朝見れば 松風ばかりや残るらむ  
『松風』より

歌・わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶとこたへよ

『古今集』在原行平

・琴の音に峰の松風通ふらしいづれの緒よりしらべ初めけむ

『拾遺集』齋宮女御

・白妙にたなびく雲を吹きまぜて雪にあまぎる峯の松風

『拾遺愚草』藤原定家

例\*宗旦作茶杓共筒 藤田美術館蔵。『中興名物記』所載。へ村雨へとともに二本あつたがへ村雨へは焼失。\*京菓子の銘。小麦粉に白味噌、水飴等を混ぜ焼いた物。\*練香の銘。六種薫物合のひとつ。

補 釜音は八世紀中頃 唐の陸羽による『茶経』には一沸(魚目)・二沸(湧泉連珠)・三沸(騰波鼓浪)、それ以降の疲れた湯を老水と名付け分類している。次いで北宋の『茶録』には蟹眼、『大観茶論』には魚眼の語が見える。日本では釜の六音といって、たぎる程度により、六つの名が付けられている。魚目・蚯蚓・岸波・遠浪・松風・無音。あるいは魚眼・蟹眼・雀舌・小涛・大涛・無声。松風はそのひとつであるが、釜音の総称として用いられることが多い。釜音を六段階にも分類していたことは先人達がいかに湯相に注意を払っていたかが見える。宗旦作の茶杓は「松風」「村雨」の二本削った物の内、現存する一本である。又妙斎好舟香合銘(蚤少女)は謡曲『松風』にちなみ、後世の言い伝えながら行平が月を眺めたといわれる月見山の松(月見松)を材として造られた。謡曲には物語の背後を彩る景物があるが、『道成寺』が桜、『弱法師』が梅ならば『松風』は月であろう。月を景物とする曲はこのほか『三井寺』『大社』『姨捨』『江口』『雨月』『砧』『清経』『小督』『猩々』『融』『吉野天人』などがある。また、女が烏帽子、狩衣などの男の衣装を身につける曲に『杜若』『巴』『二人静』『水無月祓』『道成寺』『百万』『卒都婆小町』『三輪』などがある。白拍子の姿、狂女、恋人を慕う姿としての意味がある。

【まつしま】松島 マツシマ

① 陸前国現在の宮城県松島湾の島々と湾岸からなる景勝地。日本三景の一つ。

月の名所としとしても知られる歌枕。

季 ①無季

同・塩竈の浦・千松島・松が浦島

連・雄島・五大堂・松・海人・月・瑞巖寺・鹽竈神社

文・抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭・西湖を恥ぢず。  
『おくの細道』より

歌・松島や雄島の磯にあさりせし海人の袖こそかくはぬれしか

『後拾遺集』源重之

・しほがまにいつか来にけむ朝なぎに釣する舟はここに寄らなむ

『伊勢物語』八十一より

・立ち帰りまたも来て見む松島や雄島のとま屋波に荒すな

『新古今集』藤原俊成

・松島や潮くむ海人の秋の袖月は物思ふならひのみかは

『新古今集』鴨長明

句・松島や鶴に身を借れほととぎす

曾良

例\*大名物唐物茶壺。七斤入の茶壺で三十余もの瘤があったといわれる。多数の瘤を松島の景色に見立て付いた銘。本能寺の変で焼失したらしい。\*金山山窯大津手瀬戸茶入。遠州銘。\*遠州作茶杓。先載の「立ち帰り…」の歌を引いての銘。\*鎌倉彫香合。伊達家伝来。一般に潯陽江香合と呼ばれる松(竹)、酒甕、波などが彫られた香合のひとつ。琵琶行の故事に因む意匠というが謡曲『猩々』も舞台は潯陽江である。畠山記念館蔵、根津美術館蔵(猩猩々)などが知られる。

補 松島は複雑に入り組んだ海岸線と大小二六〇余もの島々からなる景勝地で、儒学者林春斎の『日本國事跡考』(1643年)以来、安芸の宮島、丹後の天橋立と並び日本三景の一つに数えられる。土地の歴史から坂上田村麻呂、慈覚大師円仁、伊達政宗に由来のある名所旧跡も多い。現在の松島辺り一帯は元は塩竈の浦とよばれていた。松島の地名は当初たぐさんの松があったためについた名である千松島、すなわち雄島のことをいった。その後、千松島は松のある島が多いといういみに理解され広範囲の海岸と島々を総称して松島とい

われるようになった。塩竈の浦の名は『伊勢物語』八十一にはその景色を賞賛する話があり『枕草子』百九十五にも名が挙がる。『枕草子』にはその他「島は：松が浦島」と当地と思われる地名が挙げられている。陸奥へ下った源重之は先載などの陸前国松島にての歌を残している。長保二年(1000)彼は陸奥にて客死した。松尾芭蕉が曾良とともにこの地を訪れたのは元禄二年(1689)陰暦五月九日(陽暦六月二十九日)のことである。彼を訪れる数多い名所の中でも特に松島訪問を楽しみにしていたことは出立前の「松島の月まづ心にかかりて」「松島の月の朧なるうち」と逸る気持ちから推察できる。現地を訪れてその絶景に先載のごとく最大限の言葉で賛美している。アメリカのフリア美術館に六曲一双の屏風絵、俵屋宗達筆〈松島図〉がある。ダイナミックな岩と波のきわめて優れた作品であるが、画題を松島に特定することは異論が多い。

【まつりばやし】 祭囃子 マツリバヤシ

① 神事としての祭礼を盛り上げるために奏でるにぎやかな音曲。

季 ①春 夏 秋

同・お囃子

連・神社・賀茂・祇園・神輿・山車・祭太鼓・祭笛・神楽・秋祭

句・神田川祭りの中をながれけり 久保田万太郎

補・祭囃子は笛、太鼓、鉦が基本的な楽器である。「はやし」は「はゆ」の他動詞形「はやす」の名詞形。神事としての祭には春祭、夏祭、秋祭がある。

このうち春秋の祭は稲の豊穰を祈願あるいは感謝して神の送り迎えをかたどって行われる。夏祭は直接農業とは関係なく疫病、災害の退散を願う行われる。俳句では夏の季語で単に「祭」といえば夏祭、古くは賀茂祭をいう。神楽とは神に奉納する歌舞であるが特に賀茂のものが有名であったようだ。【かも】賀茂 参照。

【みそぎ】 禊 ミソギ

① 身につけている俗世間の塵、穢れ、罪、厄を落とすための神事。

季 ①夏 無季

同・祓・禊祓・清め

類・水無月祓・夏越の祓

連・禊川・沐浴・御手洗川・加茂川・茅の輪

文・吾はいなしこめしこめき穢きたなき国に到りて在りけり。故、吾は御身の禊みそぎ為むとのりたまひて、竺紫つぐしの日向ひむかの橘たちばなの小門こどの阿波岐原あはきはらに到り坐まして、禊はらぎ祓はらへたまひき。  
『古事記』上巻より

・やよひのついたちに出できたる巳の日、今日なむ、かくおぼすことある人は、御禊し給ふべきと、なまさかしき人の聞こゆれば、海づらもゆかしうて出で給。  
『源氏物語』須磨より

・君が禊を祈りてぞ書き流しやる川瀬にもかたへ涼しき風の音におどろかれても…  
『栄花物語』卷九より

曲・水無月の夏越の祓する人は、千年の命延ぶとこそ聞け。輪は越えたり御禊のこの輪越えたり。  
『水無月祓』より

歌・風そよぐならの小川の夕暮はみそぎぞ夏のしるしなりけり

『新勅撰集』藤原家隆

・五月繩さばへなす荒ぶる神もおしなべて今日は夏越の祓なりけり

『拾遺集』藤原長能

・みな月のなごしの祓する人は千年の命のぶといふなり

『拾遺集』よみ人知らず

句・夕さればへんくく草も御祓かな

小林一茶

補 先載『古事記』は黄泉国から逃れてきた伊弉諾命が禊をして穢れを祓つた話であるが、これが禊の始まりである。俗世間の塵、穢れ、罪、厄を落とすための神事を祓えというが禊はその中で主に川や海に沐浴し行う儀礼をいう。昔は六月と十二月の年二回新たな季節を迎えるに当っての祭りの忌の日であった。この内、六月の晦日を夏越といい、各地で禊をおこなった。川、海での沐浴は人のみではなく馬などの家畜も行う地方があった。近畿では茅の輪という浅茅で大きな輪を作りこれに潜ることにより禊をした。賀茂の祭りの四月午の日か未の日に斎院は賀茂川で禊をした。清潔な涼を感じる銘といえる。

【みのり】実ミノリ

① 穀物が実ること。結実。

② 努力し報われた結果。

季 ①秋 ②無季

同・稔

連・鳴子・豊年満作・祭・雀・稲妻・秋の田・秋祭

補 秋は四季のひとつの意味に止まらず、歳月、大切な時、稲の実ることなどの意味がある。鳴子は板に細い竹筒を付け田畑に据え、遠方から紐を引いて音を鳴らし雀を追い払う仕掛け。稲妻は雷の光。稲妻が多い年は稲がよく育つといわれている。

【みどころ】三井寺 ミイデラ

① 近江国、現在の滋賀県大津市にある天台宗寺門派の本山園城寺の通称。三井寺の名は『今昔物語』巻十一などによれば天智・天武・持統の三帝の産湯に用いたという関伽井屋の御井の霊泉からついた名という。付近の長等山よりの湧水は『日本書紀』天智九年(670)に「山御井」とあるものと思われる。「御井」から「三井」の名がついたのであろう。寺の伝えによれば天武天皇十五年(688)に大友与多王の邸宅を氏寺にしたのが始まりという。境内金堂付近から白鳳期の瓦が出土していることは寺の伝えに合うが、創建に関わる記録は伝説的な部分が多い。貞観元年(859)智証大師円珍が園城寺の前身と思われる大友の氏寺を延暦寺別院として再興し、同八年同寺別当、同十年天台座主に任じられた。この時から、園城寺は比叡山延暦寺とならび天台宗の拠点となる。最澄没後徐々に天台宗は、延暦寺を拠点とする円仁派(山門派)と園城寺を拠点とする円珍派(寺門派)に分裂し、各寺の座主職、戒壇独立問題などの利害関係をめぐり長く流血の抗争を繰り返すことになる。平安中期には前者の僧兵を寺法師、後者の僧兵を山法師と呼び、興福寺の奈良法師とともに強大な兵力となる。以降戦乱の渦中となることもしばしばであった。平家打倒を志す以仁王が園城寺を頼ったのは、源頼義が前九年の役の戦勝祈願をして以来、寺門派は源氏との結びつきが強かったためと思われる。寺にはへ五部心観(不動明王像(黄不動)など平安初期からの国宝が現存する。近江八景のひとつ「三井晚鐘」も当地である。

② 能の曲名。四番目物。狂女物。近江国を舞台とする。わが子千満を人買に連れ去られた母親が清水の観音のお告げで三井寺へ赴く。近江の三井寺園城寺では僧らが稚児を伴い十五夜の月見をしている。そこへ狂女と化した母親が笹を手にやって来る。戯れに僧たちを困らせながらも寺の鐘をつく。やがて稚児がわが子と気がついた狂女は正気にもどり、親子は連れ立って帰って行く。面はシテⅡ深井 曲見。

季 ①無季 ②秋

同・園城寺

連・月・鐘・笹・細波

文・此馬に打乗ッて、三井寺へはせ参り、三位入道殿のまッさき懸けて打死せん  
『平家物語』卷四より

曲・付け落ち鳥啼いて 霜天に満ちて すさましく 江村の漁火もほのかに 半夜の鐘の響きは 客の船にや通ふらん 蓬窓雨滴りて なれし潮路の楫枕 うきねぞ変はるこの海は 波風も静かにて 秋の夜すがら月澄む 三井寺の鐘ぞ さやけき  
『三井寺』より

歌・山川のひとつながれの三井の水いかでかすゑのわかれ行くらむ

『拾玉集』慈円

・三井寺や葉わか楓の木下みち石も啼くべき青あらしかな

与謝野晶子

例\* ≡三井寺切≡源頼政筆。頼政集(私家集)の断簡。

補 三井は三井の晩鐘として近江八景のひとつに数えられる琵琶湖南部の景勝地。「三井の晩鐘」とは三井寺の鐘のことで、「背東大寺、成平等院、声園城寺」(大きさは東大寺、形は平等院、音色は園城寺)といわれるほど有名な鐘であった。音色の優れた三井寺の鐘は俵藤太秀郷(藤原秀郷)が大ムカデ退治のお礼に竜神よりもらったものという伝承がある。俵藤太は平貞盛と共に平将門を打った武将として知られる。また、三井寺の鐘には更に弁慶の引き摺り鐘の伝承がある。寺門と山門の抗争の中、三井寺に攻め入った叡山の僧兵武蔵坊弁慶は三井寺の鐘を奪い、引き摺って叡山に持ち帰り講堂に吊るしたところ鐘を突いても鳴らず、強いて鳴らすと三井寺に帰ろうと泣くので、怒った僧兵が谷から落とし割れてしまった。後に和睦して鐘は三井に返されたが、小さな蛇が尾で叩いたところもとの姿に戻ったという。茶道具の世界でも「園城寺」の銘は見受けられる。

〈園城寺釜〉は肩に園城寺の陽刻文字があるが、その謂われは不明。この釜と同じく東京国立博物館蔵に〈竹一重切花入〉銘「園城寺」がある。利休が秀吉の小田原攻めの陣中見舞に作ったものと伝えられ、〈尺八〉〈夜長〉と共に竹花入の始まりといえる侘道具。三作とも葦山の竹と云えられますが質の違いから疑問視する意見もある。筆者は、〈夜長〉は花所望・花寄せの花入で、〈尺八〉は水屋花入・一重切は花運搬用の通い筒の形を表道具に仕立て直したのではないかと思っている。「園城寺」の銘は少庵による銘。花入背面に「園城寺 少庵」と彫られている。銘の由来は竹の割れを先載の弁慶の引き摺り鐘の割れに通わせたものという。謡曲『三井寺』は春の『隅田川』『桜川』と並んで親子再会譚の狂女物の代表作として名高い。月を景物とする代表的な曲である。月を景物とする曲はこのほか『松風』『大社』『姨捨』『江口』『雨月』『砧』『清経』『小督』『猩々』『融』『吉野天人』などがある。また、鐘に関わる曲には『道成寺』がある。「細波や」は琵琶湖南西岸部、志賀、長等、三井、比良の枕詞。

【みをつくし】 漣標 ミオツクシ

- ① 航行する船に水深や水脈を示すため立てられた杭の標識。
- ② 「心尽くし」「身を尽くし」「深き」に掛かる掛詞。
- ③ 『源氏物語』巻十四の巻名。光源氏二十八歳十月から二十九歳まで。冷泉帝が即位し、源氏は明石から帰京する。源氏一門の復権昇進の中、明石姫誕生の報せが届く。姫のために最善を尽くす源氏は明石の君のことを紫の上に告げる。住吉詣の折り、源氏は偶然明石の君と再会し歌を交わす。一方、病に伏せる六条御息所は娘の斎宮の行く末を源氏に托し世を去る。源氏は後見として斎宮を冷泉帝の後宮に入内させようと藤壺と計るのであった。

季 ①②③無季

連・明石の浦・難波・葦刈・芦辺

文・みをつくし恋ふるしるしにこゝまでもめぐりあひけるえには深しなとて給へれば、かしの心知れる下人してやりけり。駒並めてうち過ぎ給ふにも心のみ動くに、露ばかりなれど、いとあはれにかたじけなくおぼえて、うち泣きぬ。

数ならでなにはのこともかひなきになどみをつくし思ひそめけむ

田蓑の島に御襖仕うまつる御祓へのものにつけて、たてまつる。

歌・みをつくし心尽くして思へかもここにももとな夢にし見ゆる

『万葉集』 作者未詳

・わびぬれば今はた同じ難波なる身を尽くしても逢はんとぞ思ふ

『後撰集』 元良親王

・難波江の葦のかりねの一夜ゆゑ身をつくしてや恋ひわたるべき

『千載集』 皇嘉門院別当

例\*織部焼茶入。中興名物。遠州命銘。胴部に縦等間隔に十二の点々紋があることから『源氏物語』濡標を引いた銘である。\*《濡標茄子》紹鷗茄子の別名。漢作唐物茶入。大名物。\*香木の銘。伽羅。六一種名香の一つ。

補 「みお」しは水の緒(尾)の意味で河川や沿岸で水の流れる筋をいう。水の緒の箇所は深いので航路に適する。その箇所の標識として杭を立て航行する船に示した。深さを示す目盛が記された杭もある。「みおつくし」は「水緒つ串」が語源である。近世には水面に出る先の部分を目立つよう逆三角形に木を組んで目印とした。これを意匠化したものが今日の大阪府市の市章である。

【むかしをとこ】 昔男 ムカシオトコ

①『伊勢物語』の各章が「昔、男ありけり」で始まることから『伊勢物語』の主人公をいう。在原業平のこと。美男子、色男の典型といわれる。

季 ①無季

同・在原業平

連・伊勢物語・隅田川・都鳥・杜若・井筒

文・男子に清十郎とて、自然と生まれつきて、むかし男をうつし絵にも増り、そのさまうるはしく  
『好色五人女』 卷一  
より

曲・その業平はその時だにも 昔男と言はれし身の ましてや今は遠き世に 故も所縁もあるべからず  
『井筒』 より

・その様年の古びやう 昔男など知らぬ

『雲林院』 より

補 在原業平は天長二〜元慶四(825-880)四月五日没。平安前期の貴族。阿保

親王の五男。伊都内親王を母とする。兄は行平。六歌仙、三十六歌仙の一人。『伊勢物語』は現存する最古の歌物語。在原業平がモデルという。作者不詳。『源氏物語』とならび、その後の多くの文学作品に引用されてきた。また物語をテーマにした伊勢絵は源氏絵とならび大和絵の画題となってきた。茶道具の中では棗、菓子器などに井筒、八橋など、蒔絵の伊勢絵が見られる。隅田川香合、都鳥香合も『伊勢物語』に由来する。その他、茶入、茶杓、竹花入、菓子などの銘に、昔男をはじめ井筒・八橋・杜若・唐衣・鳶の細道・住吉・布引・白露・芥河・秋の夜・葦辺など『伊勢物語』に関わるものは数多い。【すみだがは】隅田川 【からころも】唐衣 【あづつ】井筒 【つたのほそみち】鳶の細道 参照。

【むぐら】 葎 ムグラ

① うっそうと茂っている草叢。荒れた屋敷、庭の象徴。

季 ①夏・無季

かなむぐら

同・八重葎・金葎

類・葎の宿・葎の門・枯葎・葎生むぐらう・蓬生

歌・八重葎茂れる宿の淋しきに人こそ見えね秋は来にけり

『拾遺集』 恵慶

・思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも

『伊勢物語』三より

例\*名物金華山窯茶入。玉柏手。小堀権十郎箱。\*《八重葎》備前筒花入。

如心齋添状によれば寛々齋原叟銘命。不審庵伝来。如心齋添状には備前水指とある。

補 八重葎はアカネ科・金葎はクワ科の蔓植物をいうが、文学の上ではうっそうとした草叢をいい特定の植物を限定しない場合が多い。八重葎の八重はうっそうとした様をいい、金葎の金は鉄のように強い茎という意味の修飾語と解すべきであろう。葎生は葎の自生する場所を意味する。葎の宿・葎の門は葎の生えるにまかせた荒れ果てた家、空き家か、貧しい家を意味する。いづれも季語としては夏に属する。(枯葎は冬の季語)しかし、先載の恵慶の歌のように秋、あるいは春の歌として詠まれることもある。葎は草木の生命力盛

んな夏のイメージより、人気のないさびしさを表す言葉として用いられることが多い。葎の寂しさと秋とを結びつけたのは恵慶の手柄であろう。ちなみに、武野紹鷗は〈小倉色紙〉の中で安倍仲麿の「天の原…」を好んだが、利休は先載の恵慶の歌を好んだと『重久記』にある。

【むさしあぶみ】 武蔵鐙 ムサシアブミ

① 武蔵野国で作られた鐙。または、その様式を模した鐙。

② 「さすが」「踏み」「文」に掛かる。

③ 『伊勢物語』十三の題名。

連・文・馬

季 ①②③無季

文・武蔵鐙

むかし、武蔵なる男、京なる女のもとに「聞ゆれば恥づかし、聞こえねば苦し」と書きて、うはがきに「むさしあぶみ」と書きて、おこせてのち、音もせずなりにければ、京より、女

武蔵鐙さすがにかけて頼むには問はぬもつらし問ふもうるさしとあるを見てなむ、たへがたき心地しける。

問へばいふ問はねば恨む武蔵鐙かかるをりにや人は死ぬらむ

『伊勢物語』十三

・ 武蔵鐙さすがに道の遠ければ 問はぬもゆかし問ふもうれし、返し

御音信途絶え途絶えず武蔵鐙 さすがに遠き道ぞと思へば

我らも昨日、当月十九日に山の家に移り申し候。

又、煩本服に候。

一、隅田川 筑波山 武蔵野、同じく堀兼井など御羨しく候。

一、我等富士唯一山にて堪忍申し候。富士にも劣らぬ蠅多く候。

此の兩種にて候。

一、花筒、近日相届き候由、本望に候。

一、筒、不思議のを切り出し申し候。早や望みは、これ無く候。

一、其の方、敵の城ども大略済み申す様に候事、珍重カ。

一、関白様、仰せ付けられ候御城も漸、当月出来にて候。然らば還御あるべく候や。小田原も久しき事候まじく候。方々、内に駆けつけ、限りもこれ無き由申し候。

一、旅宿の茶一服申したく候。本望にて候。摘茶を持ち来り候。恐惶かしく山にての歌にて候。

世に有りて怨めしかりし蠅打ちの音だに今は慰みにして

蠅という曲物だにもなかりせば小田原成りとせめて住むべく かしく

六月二十日

宗易(花押)

古織公御報

易

『武蔵鐙の文』千利休

例\*サトイモ科の多年草。二枚の葉の形が鐙に似る。天南星に似て五月に肉花穂を付ける。\*《武蔵鐙の文》利休の代表的書簡。東京国立博物館蔵。補参照。

補 武蔵鐙は馬具の鐙の一種で、鞍橋に吊るす力革と鐙の連結に鉤くわを用いず、透かし入りの鉄板の先に鉸具を付け力革の孔に刺鉄さすを通し連結する点に特徴がある。「さすが」に掛かるのはそのためである。『武蔵鐙の文』とは古田織部の書状に対する利休の返書。天正十八年(1590)六月二十日に書かれた。この時、利休は北条攻めの秀吉に従い小田原にいた。織部は浅野長政に従軍し、関東を転戦していた。「武蔵鐙さすがに道の遠ければ…」の織部より贈られた狂歌を冒頭に写していることからこの俗称がついた。先載の『伊勢物語』をふまえた狂歌であることはいまでもない。内容はその狂歌の返しの歌と小田原での生活の様子、竹花入が届いたようで安心したこと。珍しい竹を切り出したこと、小田原城も落城間近であることなどを簡条書きにしている。この書簡は〈園城寺竹花入〉(利休作 東京国立博物館蔵)の添え状として伝えられたが、書簡中に見られる竹花入は〈園城寺竹花入〉とは無関係で、書状とは本来別個のものである。千家、上田小平次、松平三味の旧蔵。

【むさしの】武蔵野 ムサシノ

① 武蔵国の歌枕。広義には武蔵国の平野。入間川・荒川・多摩川に囲まれた台地。現在の東京都・埼玉県・神奈川県の一部にまたがる。狭くは、東京都西部

の郊外・住宅地をいう。

季 ①無季・秋

同・武蔵野の原

連・雑木林・紫草・すすき・多摩川

歌・紫のひともとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る

『古今集』よみ人知らず

・をみなへし匂へる秋の武蔵野は常よりもなほむつまじきかな

『後撰集』紀貫之

・武蔵野やゆけども秋のはてぞなきいかなる風か末に吹くらむ

『新古今集』源通光

・ゆくすゑは空もひとつの武蔵野に草の原より出づる月影

『新古今集』藤原良経

例\*萩茶碗。啐啄齋銘。箱書より江戸で入手したことから銘がつけられたことがわかる。\*《むさしの食籠》大樋焼四方食籠。惺齋好。光悦舟橋蒔絵硯箱の形と乾山四方蓋物の形がある。

補「武蔵野は秋の千草に限りなく、月の入るべき山もなし、草より出でて草にぞ入ぬる」といわれていた。その景色はサントリー美術館蔵〈武蔵野図屏風〉に描かれ平地の深い草原に月が隠れ、遠景に富士を望む。『更級日記』には「むらさき生ふと聞くも、蘆荻のみ高く生いて、馬に乗りて弓持たる末見えぬまで高く生ひしげりて、中をわけ行くに：」と紫草の生息する歌枕のシメージではなく武蔵野の実景が記されている。武蔵野は紫草・蘆荻・うけらが花・くぬ木林など草木のイメージが付きまといさらに露・月・霜などを加えて歌に詠まれた。そこからさびしい秋の風情を連想させる歌枕となった。近代に入って武蔵野の風情を克明に書き上げた国木田独歩をはじめ徳富蘆花、植物学者牧野富太郎など多くの文化人に武蔵野の自然は愛されつづけた。現在地名には東京の西部に武蔵野市の名があり、更に西の国分寺市には武蔵国国分寺跡が遺る。

【むしのね】虫の音ムシノネ

①虫の鳴く声。コオロギ科(コオロギ・スズムシ・マツムシ・カンタン)や、

キリギリス科(キリギリス・ウマオイ・クツワムシ)などが主な虫。オスが羽をこすり合わせ音を出す。

### 季 ①秋

同・虫の声

類・虫合わせ・虫売り・虫籠むしご・虫すだく・虫時雨

連・秋草・秋野・十五夜

漢・虫

切々せつせつたり暗窓あんざうの下もと 嚶々えうえうたり深草しんそうの中うち

秋あきの天てんの思婦しふの心こころ 雨あめの夜よの愁人しうじんの耳みみ 白はく

『和漢朗詠集』より

文・日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

『枕草子』一より

・蟲は鈴虫。ひぐらし。蝶。松蟲。きりぎりす。はたおり。われから。ひを蟲。螢。

『枕草子』四十一より

・秋の虫の声いづれとなきなかに、松虫なむすぐれたるとて、中宮の、はるけき野辺を分けて、いとわざと尋ね取りつつ放たせたまへる、しるく鳴き伝ふるこそ少なかなれ。名には違ひて、命のほどはかなき虫にぞあるべき。心にまかせて、人聞かぬ山奥、はるけき野の松原に、声惜しまぬも、いと隔て心ある虫になむありける。鈴虫は、心やすく、今めいたるこそらうたけれ

『源氏物語』鈴虫より

曲・もとの秋をも松虫の音にもや友を偲ぶらむ

『松虫』より

歌・君しのぶ草にやつるる故里はまつ虫の音ぞ悲しかりける

『古今集』よみ人知らず

句・其中そのなかに金鈴をふる虫一つ

高浜虚子

補 古くは虫の範疇は現代より広範囲で、昆虫はもとより蜘蛛、蛙、蝸牛など小形の生物一般を指した。漢語では生物一般を総称することもある。万葉の時代、鳴く虫は蟋蟀ししつぱいとして総称された。その後、鳴き声を聞き分け、名称の分化が進む。平安時代において鈴虫は松虫と、きりぎりすはこおろぎと現代とは逆の虫をさすという説があるが確かなことはわかっていない。鳴く虫は秋の夕方から夜に幽かな美しい声で鳴くため、ものの哀れを感じさせる秋の

代表的風情となった。虫合わせとは、虫を持ち寄り、虫の形態や鳴き声のよしあしを聞き取り、時には虫籠の品評をも楽しむ遊び。その他、前栽に好みの虫を放ち鳴き声を評価する場合がある。さらに、『山家集』に「八条院、宮と申ける折、白河殿にて女房むしあはせらけるに、人に代りて虫具して、取りいだしける物に、水に月の映りたる由を作りて、その心を詠みける」とあるように、虫合わせに歌合わせを付ける場合などが確認できる。平安時代には鈴虫、松虫が代表的存在であったようだ。こうした虫の音好きは江戸時代、虫売りなる商売を成立させる。寛政年間、江戸で鳴く虫の人工飼育に成功した人も現れる。歌語として松虫は「待つ」、鈴虫は鈴の語から「振る」「降る」「経る」に掛けて詠まれることが多い。『古今集』仮名序に「松虫の音に友をしのび…」とは先載の「君しのぶ…」の歌を指してのことであろう。虫の音のはかなげな声は友をしのぶ寂しさに適応する。この歌を抛り所に虫の音は友をしのぶ音として謡曲『松虫』、京舞『虫の音』など舞台芸能の題材となった。

【つむぎめ】村雨 ムラサメ

① ひとしきり降っては止む雨。

② 謡曲『松風』のツレの名。シテ松風の妹。

季 ①無季 ②秋

類・むら時雨・夕立・にわか雨

連・松風

歌・庭草に村雨降りてこほろぎの鳴く声聞けば秋付きにけり

『万葉集』作者未詳

・村雨の露もまだひぬ真木の葉に霧立ちりぼる秋の夕暮

『新古今集』寂連

例\*宗旦作竹茶杓。本来共筒で〈松風〉と一雙であったが〈村雨〉は焼失。

\*唐物茶壺。伊井家所持。本圀寺蔵。\*瀬戸茶壺。前田家より家老の本多政重へ移り現在藩老本多蔵品館所蔵。\*中興名物。瀬戸金華山窯茶入。根津美術館蔵。

補 村雨は秋の歌に多く用いられる傾向はあるが、降り方を表す言葉であり必

ずしも季節を限定しない。あえて季節を限定する場合、むら時雨Ⅱ冬、夕立Ⅱ夏などの言葉がある。村雨はこうしたひとしきり降る雨の総称である。【まつかぜ】参照。

【もしほ】藻鹽 モシオ

① 昔の藻鹽焼製塩の工程で、積み重ねた大振の海藻に海水を潮桶で汲み注ぐ作業。あるいは、その海水。

季 ①無季

同・藻塩

類・藻鹽草・…煙・…火

連・塩屋・塩釜・海人・塩汲・松風

文・今はただ、あまたかきつむ藻塩草、潮の誰をか頼むべき。煙絶えせぬ薫もの、このかたみなる思ひあらば、ひとり残さず。

『栄花物語』卷九より

・かきつめて見るもかひなし藻塩草おなじ雲居の煙とをなれ

と書きつけて、みな焼かせ給。

『源氏物語』幻より

歌・来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ

『新勅撰集』藤原定家

例\* 《塩屋釜》仙叟好。乙御前形炉用釜。貝、波地紋。塩屋形鑲付に小さな穴があり湯気を出して塩を焼く煙に見立てる。宮崎寒雉作。\* 《塩汲棗》円能斎好薄茶器。謡曲『松風』にちなみ塩汲桶を模して寸切妹朱塗うるみ。胴に波、蓋裏に千鳥、甲に松風の字の蒔絵がある。\* 《藻塩草》古筆手鑑。鎌倉時代初期までの集成。京都国立博物館蔵。

補 藻鹽焼製塩とは大振の海藻を積み重ね海水を含ませこれを焼いて塩灰を作り、これを海水に溶かし釜で煮て製塩する方法。製塩方法としては天日製塩以前の旧式方法。

【もちづき】望月 モチヅキ

① 陰暦十五夜の月。満月。狭義には陰暦八月一五夜の月をいう。

② 能の曲名。四番目物。芸尽物。近江国守山を舞台とする。望月秋長に主君を殺された小沢刑部友房は宿の亭主に身をやつす。偶然に宿に泊まった秋長

を元主君の妻子とともに芸を尽くして油断させ、ついに討ち果たし本望を遂げる。

③ 地名。旧信濃国。平安時代からの馬の産地で駒牽とって朝廷に献上した。各地からの献上馬のうち最も良質とされ、望月の馬としてもてはやされた。

季 ①秋 ②春 ③秋

同・月・満月・十五夜

連・兔・観月

文・望月の隈なきを千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるが、いと心深う青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたる村雲隠れのほど、またなくあはれなり。

『徒然草』第三百三十七段より

曲・名を望月の今夜とて夕べを急ぐ人心知るも知らぬももろともに…

『三井寺』より

歌・ねがはくは花のしたにて春死なんそのきさらぎの望月の頃

『山家集』西行

・望月のころはたがはぬ空なれど消えけむ雲のゆくへ悲しも

『拾遺愚草』藤原定家

例\* 《望月釜》 東山御物。古天命釜。義政銘。丸釜、鑲付鬼面。後世の補修で底割れに銀を鑄込み山形の景色となつてゐるのが特徴。\* 《望月》 名物茶壺。岡部美濃守宣勝より徳川家綱に献上。以来柳営御物。\* 《望月棗》 庸軒好。黒中棗。初代宗哲作。\* 《望月棗》 惺斎好。外側黒塗。内側銀地に落葉蒔絵。六代宗哲作。\* 《望月間道》 名物裂。変り縞に数種ある。内二種は東京国立博物館蔵。望月宗竹の所持に因む。

補 月の名はその満ち欠けにより名称がある。地球を中心に月が太陽の反対側に位置したときの満月を望。太陽と地球の間に位置する最も欠けた月を朔（新月）という。朔から三日目を三日月、陰暦七・八日を上弦の月、上り月、十五夜の月を望月、下り月、そして陰暦二十二・二十三日を下弦の月、朔とくり返す。上弦の月・下弦の月を弓張月とも半月ともいう。また、望月を満月ともいう。さらに十六日を十六夜の月、十七日を立待月、十八日を居待月、

十九日を寝待月、ほぼ半分欠けた月を片割れ月、上弦下弦の月の異名に弦月、弓張月など豊富な言葉により区分している。陰暦、すなはち月の満ち欠けの一巡を一ヶ月としていた時代、現代よりはるかに月に感心がもたれていたことが想像できる。また望月はその形態から完璧なもの、満たされたもののイメージがある。そのことからゆるぎない権勢、あるいは完成された美を象徴する。前者には藤原道長の「この世をば吾が代とぞ思ふ望月のかけたることもなしと思へば」（小右記）の歌があり、後者には「月も雲間のなきは嫌にて候」（禅鳳雑談）という侘び茶の美を言い当てた村田珠光の言葉がある。古来、中国で月は不死、あるいは再生の意味を持つ。漢文での望月は「月を望む」と読み下す。

【もみぢがり】紅葉狩 モミジガリ

① 野山に紅葉を眺めに出かけること。

② 能の曲名。観世信光作。五番目物。鬼退治物。信濃国戸隠を舞台とする。鹿狩に戸隠山に出かけた平維茂は紅葉狩の宴を楽しむ女たちの一行に出会う。酒宴に誘われ加わった維茂一行はいつの間にか眠りに落ちてしまう。女たちは実は鬼神であり維茂らに危険が迫る。夢うつつの中で石清水八幡の末社の神が現れ維茂に太刀を授ける。目覚めた維茂はその太刀で鬼神を退治する。面は・前ジテⅡ増・後ジテⅡ般若。

季 ①②秋

同・観楓

連・白露・時雨・山路・紅葉酒・錦・戸隠

漢・秋興

林間に酒を暖めて紅葉を焼く石上に詩を題して緑苔を掃ふ 白

『和漢朗詠集』より

・紅葉

堪へず紅葉青苔の地またこれ涼風暮雨の天 白

『和漢朗詠集』より

曲・時雨を急ぐ紅葉狩 時雨を急ぐ紅葉狩 深き山路を尋ねむ

『紅葉狩』より

歌・白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちぢに染むらむ

『古今集』藤原敏行

・白露も時雨もいたく守山は下葉のこらず色づきにけり

『古今集』紀貫之

例\* 《紅葉》 丹波焼茶入。窯変し赤、黄が交じる。溝口家伝来。高橋箒庵所持。\* 《紅葉呉器》 茶碗分類上の名称。赤みを帯びた呉器茶碗。

補 紅葉は楓など特定の植物をいうのではなく落葉植物の葉が黄色紅色に変化した様をいう。このような葉の変化を古語では「もみつ」といい、「もみぢ」の語源となる。落葉樹の葉が黄色くなるのは葉に含まれる緑色のクロロフィルが分解され、キサントフィルなどの黄色い色素が残るため、赤くなるのはクロロフィル分解後、アントシアンと呼ばれる赤い色素が細胞液の中に作られるためである。古人は葉が紅葉する原因は露、時雨、霜が葉の色を染めたものと考えていた。右の敏行、貫之の歌もそうした観点に立つ。時雨、露が紅葉の縁語であるのは単に季節の一致に因るものだけではない。先載の白居易の詩のように紅葉を焚いて温める酒を紅葉酒という。また、炭以外の火を用いる野点の茶をふすべ茶という。紅葉酒、ふすべ茶に関しては【おちば】落葉 参照。紅葉を景物とする謡曲は『紅葉狩』のほか『龍田』『志賀』『花筐』『飛雲』『六浦』などがある。

【やうじゆう】 養老 ヨウロウ

- ① 老いをいたわり長寿を得ること。老人を安楽に生活させること。
- ② 美濃国多芸郡、現在の岐阜県養老郡の地名。養老の滝がある。
- ③ わが国古代の年号。西暦七一七年から七二四年まで。元正天皇は②の滝行幸を機に、霊亀二年を改め養老元年とした。
- ④ 能の曲名。世阿弥作。脇能物。男神物。美濃国を舞台とする。美濃国本巢郡に霊泉が出たとの知らせに勅使が検分に赴く。勅使は現地で樵の親子に出会う。親子は孝行の徳が報いられ滝の霊水が得られたこと、この水が老いの養いとなったことから養老と名づけられたことを述べる。親子は勅使に水を汲み捧げ去った。空から楽の音が聞こえ山神が現れて君の八千代の栄えを祝って舞う。面は前ジテ 小牛尉 三光尉 後ジテ 邯鄲男。

季 ①②③無季 ④春

類・養老の滝

連・長寿・孝子・泉

文・因て当耆郡多度山たどの美泉よきいづみを覽て、自ら手面ておもてを盥あらひしに、皮膚滑なめらかなるが如し。亦また、痛いたき処ところを洗あらひしに、除いき癒いえずといふこと無し。(中略)美泉は即ち大瑞だいずいに合あへり。(中略)天下に大赦たいしやくして、靈龜三年れいくみを改めて、養老元年とすべし。

『続日本紀』養老元年十一月より

・昔、元正天皇の御時、美濃国に貧しくいやしき男ありけり。老いたる父をもちたりけるを、此男、山の木草をとりて、その價あたひをえて父をやしなひけり。(中略)或時ある、山に入て薪をとらむとするに、(中略)石の中より水ながれいづることあり。其色酒にいたりければ、汲みてなむるにめでたき酒なり。うれしく覚えて、其後日くにこれをくみて、あくまで父を養ふ。時に、御門みかど此ことをきこしめて、靈龜三年九月に、其所へ行幸ありて御覽じけり。是則これすなはち、至孝しかうのゆへに天神、地祇ちぎあはれみて、其徳をあらはすと、かむぜさせたまひて、のちに美濃守になされにけり。その酒出いでけるをば、養老の滝と伝とぞ。

『十訓抄』六の十八より

歌・いにしへゆ人の言ひける老人のをつといふ水そ名に負ふ滝の瀬

『万葉集』大伴東人

曲・さてこそ老いたる親を養ひ得たる菓の水なればとて 養老の滝とは名付けられたると申す

『養老』より

例\*《養老釜》円能齋好。養老の滝孝子伝説を題とした尾垂釜。薪の形で鏝付は繩の結び目形。地紋は紅葉の枝と花押。佐々木彦兵衛造る。

補 現在の岐阜県養老郡養老町養老公園に滝はある。『続日本紀』によれば、靈龜三年九月二十日に元正天皇美濃国行幸により優れた効能が認められ、同十一月に年号の改定がなされた。ちなみに地名の当耆たぎは滝の古語という。翌養老二年二月、帝は再び行幸し、さらに天平十二年十一月聖武天皇も行幸している。このとき伴をした東人の歌が先載の万葉歌である。但し、『続日本紀』には「美泉」「醴泉」とあり「酒」孝子譚との絡みはない。『風土記』播

磨国、豊後国、肥前国には「酒泉」「酒水」「酒殿の泉」と記載され「酒」の語が目立つ。鉱泉を意味するものであろうか。『今昔物語』三十一の十三にもやはり「酒泉」の伝説はある。さらに、鎌倉中期の『十訓抄』あるいは『古今著聞集』にいたっては孝子譚として仕立てられ、以後多くの孝子酒泉伝すなわち、貧しくとも親孝行な息子が酒の湧く泉や瀧を発見し（天が孝行息子に授け）、親に与えて養生させるといふ話の手本となる。謡曲『養老』もその一例である。『美濃雑事紀』『養老寺縁起』には醴泉を発見した孝行息子の名は源丞内となっている。

【やまかは】山川 ヤマカワ

- ① 山と川。山を流れる川。
- ② 「山川の」は「浅」音「たぎつ」に掛かる枕詞。
- ③ 赤穂義士討ち入りの合言葉。
- ④ 白酒・濁酒の異名。山を流れる川の白濁からの称。

季 ①②④無季 ③冬

連・討ち入り・桂籠・巴・暁

歌・志賀の山越えにてよめる

春道列樹

山川に風のかけたる柵しがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり 『古今集』より

・紅葉のさかりに高雄山にまかりて 烏丸光広

散るは浮き散らぬは沈むもみぢ葉のかけや高雄の山川の水

『黄葉集』より

例\*松江の銘菓。不味好み押物菓子。

補 「山川」は「やまかは(ワ)」と読めば山と川、「やまがは(ワ)」と読めば山を流れる川という意味となり、清音濁音により区別する傾向がある。元禄十五年十二月十四日、吉良邸に討ち入った大石内蔵助良雄ら赤穂浪士四十七士は、上野介の首を討ち、主君の無念を晴らした。この事件はその後、時代を超えて語り継がれ多くの文学、演劇の題となった。合言葉の「山・川」は、赤穂義士討ち入りの際、暗闇での同士討ちを避けるためにかけ合ったという。史実か否か今は立ち入らぬが俗説としても早くからの伝えである(浅野仇討記)。この合言葉は後に記す山鹿素行の「やまが」をもじったという説があ

る。ちなみに『仮名手本忠臣蔵』では「天・川」が合言葉となっている。この事件は師走の茶趣として採り上げられることがある。関連する道具には蕎麦籠花入・蕎麦饅頭・巴釜・巴棚・巴高台の茶碗・桂籠花入・銘「暁」の諸道具などがある。待合に山鹿流陣太鼓を飾り、蕎麦懐石による茶事も茶趣に合う。蕎麦は討ち入りに際し一部義士たちが蕎麦屋の二階に集まったことに因み、巴は大石家の家紋(瘦双ツ巴)。山鹿流陣太鼓とは内蔵助の手にした合図の陣太鼓。山鹿流とは山鹿素行の兵法のことで、素行は赤穂藩と深い縁がある。桂籠は利休好みの花入。桂川の漁師が使っていた鮎籠を見立てたもの。

利休―少庵―宗旦―宗徧と伝わる。その後の所持者は吉良上野介、坂本周斎などの名が伝わる。ちなみに、宗徧は写しを七つ作った。討ち入り後、義士たちは吉良の首奪還の追手に備え、吉良邸にあった桂籠を布に包み槍に掲げて首に偽装し泉岳寺まで凱旋した。この籠は丸く丁度人の頭位の大きさである。このときの桂籠本歌という花入が神戸の香雪美術館にある。籠の一部にある疵はそのときの槍の痕という。現在、桂籠は多くの作家に写し継がれ、鮎に因み夏季を主な出番とするが、赤穂義士に因み師走の時季に第二の出番を迎える。利休の時代、この花入は掛花入だが、現代では置花入として使われることが多いように思われる。松江の銘菓は「山川」は不味好み。先掲の「散るは浮き…」の歌から想を得た菓子という。歌の内容が示すとおり本来秋の菓子だが、これも赤穂義士の合言葉に因み師走にも使われる。

【やまざと】山里 ヤマザト

- ① 山間部にある集落。山奥にある家。
- ② 京の都周辺の山間にある隠棲の地あるいは別荘地。
- ③ 市中にありながら山間の風情を持たせた庵や邸宅。

季 ①②③無季

同・山居・山家・古里

類・庵

連・市中の山居・隠遁

文・神無月のころ、栗栖野くるすのといふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしはべに、遙かなる苔の細道を踏み分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉

に埋もるゝ懸樋の雫ならでは、つゆおとなふものなし。閑伽棚に菊・紅葉  
など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。

『徒然草』第十一段より

歌・花をのみ待つらむ人に山里の雪間の草の春を見せばや

『壬二集』藤原家隆

・住みわびぬ今は限りと山里に身をかくすべき宿もとめてむ

『伊勢物語』五十九より

・ひぐらしの鳴く山里の夕暮れは風よりほかにとふ人もなし

『古今集』よみ人知らず

・山里にひとりながめて思ふかな世に住む人の心強さを

『新古今集』慈円

・山里に憂き世いとはむ友もがな悔しく過ぎし昔語らむ

『新古今集』西行

例\* 《山里棚》遠州好風炉置き棚。桑材。\* 《山里文琳》大名物瀬戸茶入。

当初「村雨」の銘があつたといわれるが、加藤楓庵(清正家臣、八代城主)が  
慈円の「山里にひとりながめて…」の歌より追銘をつけた。

補 中国古来の隠遁思想を手本とするものであろうか、平安時代貴族たちは小  
野・嵯峨・桂・宇治など都から程よく離れた地に別荘を建て、世俗から解放  
された生活に憧れを抱いた。そうした貴族たちの別荘地や別荘、粗末な庵ま  
でも総称して山里と呼んだ。こうした流行から後世の草庵茶室は市中にあっ  
ても山居の風情を醸し出すよう設計された。豊臣政権の象徴である大坂城の  
本丸北側松林に囲まれた所に草庵茶室が設けられ山里と称した。二畳隅炉の  
極侘びた茶室であつたらしく、毛利輝元、神谷宗湛など重要な大名や豪商が  
ここで秀吉自らの接待を受けている。本格的な対面所の備わる大坂城内にこ  
のような小座敷があることは芸術的意味のみならず政治的意味をも想像させ  
る。同名の茶室は伏見城、聚楽第、肥前名護屋城、江戸城にも建てられてい  
ることから山里は草庵茶室の総称ともいえる。侘茶に相応しく、意味深く各  
季節に使える銘である。

【やまぢ】山路 ヤマジ

① 山道。山や峠を越える道。

季 ①無季

同・山道

連・山居・人生・山遊び・道程・草笛

歌・秋山の黄葉を茂み惑ひぬる妹を求めむ山路知らずも

『万葉集』柿本人麻呂

・月読の光りを待ちて帰りませ山路は栗のいがの多きに

『良寛歌集』良寛

句・山路来てなにやらゆかしすみれ草

松尾芭蕉

例\*《山路の梅》円能斎好みの菓子。落雁に大徳寺納豆を散らしたもの。

補 人里から山中へ導くのが山路であり、山居の気分に浸ろうとする茶の湯にはうつつつけの銘である。その他、路は人生を表す。無季の銘ではあるが「山遊び」は春の季語。先載芭蕉の句は『野ざらし紀行』に「大津に至る道、山路をこえて」とある。

【やまびと】山寺 ヤマデラ・サンジ

① 山中にある寺。自然界の靈気の吸収、俗界を離れ隠棲、あるいは病氣療養の意味がある。特に平安時代以降、密教系寺院に多い。

② 山形県立石寺の通称。

季 ①②無季

連・入相の鐘

漢・山寺

千株せんちゆうの松まつの下の双峰さうほうの寺てら一葉いちえふの舟ふねの中万里うちばんりの身み

白はく

『和漢朗詠集』より

文・山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覚大師の開基にして、殊に静閑の地なり。一見すべきよし人々のかかむるによりて、尾花沢よりとつて返し、その間七里ばかりなり。日いまだ暮れず。麓の坊に宿かり置きて、山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし、松柏年旧り、土石老いて苔滑らかに、岩上の院々扉閉ちて物の音きこえず。岸をめぐり岩を這ひて仏閣を拝し、桂景寂莫しとて心澄みゆくのみ覚ゆ。

閑さや岩にしみ入る蟬の声

『おくのほそ道』より

歌・山寺に詣でたりけるによめる

宿りして春の山辺に寝たる夜は夢のうちにも花ぞ散りける

『古今集』紀貫之

・山寺の春の夕暮れ来て見れば入相の鐘に花ぞ散りける

『能因法師集』より

・山寺の入相の鐘の声ごとに今日も暮れぬと聞くぞかなしき

『拾遺集』よみ人知らず

・山寺の石の階きざしおりくれば椿こぼれぬ右にひだりに

落合直文

・やまでらのほふしがむすめひとりゐてかきうるにはもいろづ

きにけり

『鹿鳴集』会津八一

補 山寺は人里はれた秘境にあるため隠棲の気分があり侘び茶に相応しい。芭蕉の句もそうした環境が生んだ絶唱であろう。立石寺は山形市山寺の宝珠山の中腹にある。山号宝珠山、開山は延暦寺三代座主慈覚大師円仁。ちなみに円仁は天長六年(829)すら九年間東北巡錫しており建立の発端となったものと思われる。能因法師の歌は『新古今集』では「山里の春の夕暮れ：」。謡曲『道成寺』は「山寺の春の夕暮れ：」として引かれている。入相の鐘とは夕暮れに寺でつく鐘。先載の二首のように「散る」「かなし」につながる侘しさをかもしだす。

【ゆきあかり】雪明 ユキアカリ

① 雪の反射のため、わずかな灯火で闇の夜が薄明るくなること。

季 ①冬

連・蛍雪・螢窓雪案

漢・孫氏世録にはく、康家貧しくして油なく、常に雪に映えいじて書を読む。少小より清介、交遊雑ならず。後に御史大夫に至る。

『蒙求』孫康雪に映えいじ車胤螢を聚あつむより

歌・さいはての駅に下り立ち／ゆきあかり／さびしき町に歩み入りにき

『一握の砂』石川啄木

句・雪明り一切経を蔵したる

高野素十

補冬の夜の風情を表す言葉。ほのかな光が冬の夜の静寂さを引き立てる。近世より歌語となつたらしく古歌には見当たらない。晋の時代、車胤と孫康は貧しく油が買えず、車胤は螢の光で、孫康は雪明かりで書物を照らし勉強し後に大成したという故事は「螢の光、窓の雪」という歌詞で馴染み深い。ちなみに「螢窓雪案」の案とは机のこと。

【ゆめ】夢 ユメ

- ① 睡眠中に見たり聞いたり感じたりする現実のような空想の体験現象。
- ② 仮想の世界の中にある、現実ではない様。転じて、この世ではない世界。
- ③ 「人生は畢竟夢なり」といわれるように現世を虚しく否定的にとらえた表現。仮の世界。
- ④ 将来の理想。希望。

季 ①②③④無季

類・夢路

連・幻まぼろし・小町こまち・明恵・莊子・邯鄲 くくぜん

漢・昔者、莊周夢に蝴蝶と為る。栩栩然として蝴蝶なり。

『莊子』齊物論より

・我れ早に華髪を生ず 人生夢の如し

蘇軾『念奴嬌』より

曲・榮華の程は五十年 さて夢の間は粟飯の一炊の間なり 不思議なりや測り難しや つらつら人間の有様を案ずるに 百年の歡樂も命終れば夢ぞかし 五十年の榮華こそ身のためにはこれまでなり 榮華の望みも齡の長さも 五十年の歡樂も 王位になれば是までなり げに何事も一炊の夢

『邯鄲』より

歌・思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを

・うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき

『古今集』小野小町

・夢にだに見ゆとは見えじ朝な朝なわが面影に恥づる身なれば

『古今集』伊勢

・ながきよの夢をゆめぞとしる君やさめて迷へる人をたすけむ

例\* 《夢の字》遠州好、御本茶碗。釜山から茶碗に成形した生地をとりよせ、遠州が茶碗胴部に夢の字を書き、送り返して焼成したものとされている。遠州宗家蔵。\* 《夢記切》明恵上人の記した『夢記』の断片。元は卷子本。補魂の存在を強く信じていた古人にとって①の夢の世界は重要な存在であった。例えば夢の中で恋しき人と会うことは現に会うことにも等しく喜びを感じていた。先載の夢の歌人といわれる小町の歌はその心をよくあらわしている。そもそも夢に恋しき人が現われたり、恋しき人の夢の中に自分が現われたりすることはお互いの夢のなかに魂が飛んでいった結果と考えていた。こうした夢の信仰とでもいうべき夢の解釈があればこそ先載伊勢の歌は成立する。明恵上人は自分の見た夢を長年筆記し『夢記』を著している。古人にとつての夢の大切さを物語っている。謡曲『邯鄲』は五十年にわたる栄華を極めた人生も目覚めれば一瞬の夢であったことに気付いた青年が人生のはかなさを悟る話。『莊子』斉物論は夢の中で莊子(周)が蝶になり、「周の夢に蝴蝶と為りしか、蝴蝶の夢に周と為りしか」と問う話。【さうじ】莊子 参照。②③より飛躍して仏事に用いる銘ともなる。

【ゆめのうきはし】夢の浮橋 ユメノウキハシ

① 夢に現れた浮橋。夢のような浮橋。

② 『源氏物語』最終巻となる巻五四の巻名。薫二十八歳の夏。死にきれず出家した浮舟を忘れられず横川の僧都を訪ねた薫は浮舟への手紙を彼女の弟の小君に託す。その夜、横川から下山する薫一行の松明は小野の山荘の浮舟の目にも触れた。しかし、浮舟は過去の思いを断ち切るかのように一心に阿弥陀仏にすがるのであった。翌日、薫は小君を使い浮舟に手紙を送る。浮舟は弟に会いたい気持ちを抑え、対面を拒み、人違いとして薫へ返事すら書かない。

季 ①春 無季 ②無季

類・浮橋・舟橋

連 源氏物語

文・片端は水にのぞき、片端は島にかけて、いかめしき釣殿造られて、をかし

き舟ども下ろし、浮橋渡し、暑き日盛りには人々涼みなどしたまふに、..

『うつほ物語』祭の使より

歌・春の夜の夢の浮き橋とだえして峰にわかるる横雲の空

『新古今集』藤原定家

補 浮橋は筏や舟を並べ板を渡して橋にしたもので頼りない、はかないものの喩え。先載の定家の歌に始まり歌語として数例を見る。この歌の意をあえて説明的に追えば、「夜の夢が途切れてしまったとき横に流れる雲が峰にかかり分かれていく、そんな(別れの朝のような)春の暁の空よ。」となるうか。「夢の浮橋」は『源氏物語』の結巻の巻名で、「とだえして」は小説の結末らしい結びのないまま終わった『源氏物語』の結末を連想させる。ちなみに「とだえ」は「橋」の縁語。『狭衣物語』巻四「はかなしや夢のわたりの浮橋を頼む心の絶えもはてぬよ」も視野にあるう。「峰にわかるる」は『古今集』壬生忠岑「風吹けば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か」、があり、「わかるる横雲」について『文選』高唐賦の朝雲暮雨の故事(楚の襄王が夢で巫山の女神と契り朝雲はその名残)を踏まえる。「横雲の空」は『新古今集』藤原家隆「かすみたつ末の松山ほのぼのと波にはなるる横雲の空」を引く。総じて、はかなさ、むなしさを基調とした叙情あふれる銘。

【ゆや】熊野 ユヤ

- ① 地名。和歌山県熊野クマノの音読み。【くまの】熊野 参照。
- ② 能の曲名。三番目物。現在鬘物。京の都を舞台とする。「湯屋」「遊屋」「湯谷」などともいう。遠江国池田の長者の娘熊野は平宗盛の寵愛を受けていた。故郷の病の老母を見舞うため暇を請うが宗盛はなかなか許そうとはしない。それどころか宗盛は熊野を伴って花見に行こうとする。そこへ国元から老母の危篤を伝えるが来る。熊野は老母の手紙を示し再度暇を請うが聞き入れられない。熊野は宗盛に従い清水寺まで花見に行く。酒宴の中で熊野は重い心のまま所望により舞を舞う。突然、村雨が降り花を散らす。熊野は「いかにせん都の春も惜しけれど馴れし東の花や散るらん」と詠み短冊にしたため宗盛に渡す。宗盛はようやく熊野に暇を与え、熊野は清水の観音様のご利生と喜び、急ぎ国元へ旅立つ。面はシテⅡ若女 増 孫次郎 小面。

季 ①無季 ②春

同・湯屋・遊屋・湯谷

連・花見・短冊

曲・さても熊野久しく都におん入り候ふが 老母のおん労はりとて たびたび人をおん上せ候へども おん下りもなく候ふほどに このたびは朝顔がおん迎ひに上り候  
『熊野』より

補 昔から「湯谷松風に米の飯」といい、謡曲『熊野』『松風』は米の飯のよ  
うに何度聞いても飽きない名曲だといわれてきた。ユヤと読む場合とクマノ  
と読む場合の法則的根拠は明快ではないが、現代では地名はクマノ、謡曲は  
ユヤと区別しているようである。

【よいばえ】横笛 ヨコブエ

① 口に対し横にあてがい吹く笛の総称。高麗笛・太笛・能管・篠笛などがあ  
る。狭義には雅楽の唐楽、催馬楽などに用いる笛。

② 紫式部『源氏物語』巻三十七の巻名。光源氏四十九歳二月から秋まで。柏  
木の一周忌も終え、源氏は薫の幼い姿に己の老いを自覚する。秋、夕霧は柏  
木遺愛の横笛を落葉宮の母一条御息所より譲り受ける。その夜、夕霧の元に  
柏木の亡霊が現れ、横笛をしかるべき人に伝えるよう告げられる。夕霧は源  
氏に相談し横笛を預かってもらう。源氏は横笛を譲られるべき人は薫以外に  
ないと思う。

③ 『平家物語』巻十に登場する女の名。建礼門院の仕女。平重盛の臣斎藤時  
頼の妻となるが時頼は出家し滝口入道となる。彼を慕い嵯峨の寺を訪れるが  
再会できず尼となる。

季 ①②③無季

同・横笛 おうてき

連・敦盛・桓野王 がんやわう

文・笛は横笛、いみじうをかし。遠うより聞こゆるがやうやう近うなりゆくも  
をかし。  
『枕草子』二百七より

・後に聞けば、修理大夫経盛の子息に大夫敦盛とて、生年十七にぞなられ  
ける。それよりしてこそ熊谷が発心の思ひはすゝみけれ。件の笛は、おほ

ち忠盛笛の上手にて、鳥羽院より給はられたりけるとぞ聞えし。経盛相伝せられたりしを、敦盛器量たるによつて持たりけるとかや。名をば小枝とぞ申ける。

『平家物語』巻七より

歌・よこ笛のしらべはことにかはらぬを空しくなりし音こそつきせぬ

『源氏物語』夕霧

補横笛は琴・琵琶と並んで貴族の嗜む楽器であつた。当然『源氏物語』には頻繁に登場する。古くは『国家珍宝帳』に「雕石横笛一口」とあり、これに該当するものと思われる石製の横笛が正倉院に現存する。一般に横笛は竹製の七孔が基本形で、材は煤竹が最良という。桓野王は晋代の横笛の名手。③の横笛が尼となつて住んだと伝えられる堂が奈良法華寺にあり、後世のものが彼女の像も安置されている。

【よしの】吉野 ヨシノ

① 大和国の歌枕。現在の奈良県の南部。奈良盆地の南限より山岳地帯に吉野郡はあり、県全域面積の六〇%を占める。東は三重県、南・西は和歌山県に接する。吉野山は連山で吉野川は紀ノ川の上流である。この地は壬申の乱・後醍醐帝遷都などの歴史の舞台であり、持統天皇をはじめ多くの天皇の行幸があつた。古くから山岳信仰の地であり神仙境とされ、各時代の歌人に詠まれ続けてきた。

② 江戸時代初期の遊女の名。京都六条柳町の遊廓で吉野大夫の名は世襲されたが二代目が茶の湯の世界に名を残す。本名松田徳子(1606~1643)。茶の湯の他、花・香・和歌など諸芸に明るく、多くの文化人の寵愛を受ける。灰屋紹益に身受けされ妻となつたことは井原西鶴の『好色一代男』に描かれている。

季 ①無季 春 ②無季

同・み吉野・芳野・与之乃

類・吉野川・吉野山・金峯山寺・宮滝・国栖・二人静

連・桜・玉節の舞・花筏

漢・駕に吉野宮に従ふ

高向諸足

在魚を釣りし士 方今鳳を留むる公 琴を弾きて仙と戯れ江に投りて神  
と通ふ 柘歌寒渚に泛かび 霞景秋風に飄る誰か謂はむ姑射の嶺 蹕を駐

む望仙宮  
ぼうせんきゆう

『懷風藻』より

歌・よき人のよしとよく見てよしと言ひし芳野よく見よよき人よく見

『万葉集』天武天皇

・見れど飽かぬ吉野の川の常滑の絶ゆる事なくまたかへり見む

『万葉集』柿本人麻呂

・み吉野の象山のまの木末にはここだも騒く鳥の声かも

『万葉集』山部赤人

・春霞立てるやいづこみよしの吉野の山に雪は降りつつ

『古今集』よみ人知らず

・み吉野の山の秋風さ夜ふけてふるさと寒く衣うつなり

『新古今集』藤原雅経

・吉野山こずゑの花を見し日より心は身にもそはず成にき

『山家集』西行

・吉野川高嶺の桜ちらぬまも花に流るる水のしらなみ

『衆妙集』細川幽斎

例\*《吉野山》青磁中蕪花入。大名物。後柏原天皇勅銘。柳營御物となった後、酒井忠祿所持となる。\*《吉野山》名物瀬戸茶入。茂右衛門の作と伝えられる。小松宮彰仁親王所持。\*《吉野鮮桶水指》了々斎、惺斎好。吉野の鮎すしの桶を模ったもの。宗哲造る。\*《吉野間道》名物裂。浅葱地に蘇芳・茶・白などの縞の入った間道。吉野太夫所持と伝えられる。\*《吉野切》元は斐紙の冊子本。恋歌の散らし書き。南北朝時代の筆。\*《吉野山図茶壺》\*《吉野窓》円形の下地窓。高台寺境内の遺芳庵にその源があり、吉野大夫の好みといわれている。\*《吉野棚》円能斎好の小棚。《吉野窓》を取り入れた春慶塗の棚で、勝手付きの障子は葦障子に取り替えられる。

補 奈良の吉野は大和朝廷黎明期より記紀に登場する。それによれば、神武天皇は吉野で尾のある人と出会ったという。当時この地は、大和国とは郭別した遠つ国であったことがわかる。その後、応神天皇・雄略天皇と行幸があり、斉明天皇二年(656)に岡本宮造営に伴って吉野に離宮を造営した。これが吉野宮である。古くから山岳信仰の霊場であり、天武天皇元年(672)、壬申の

乱にあたつて大海人皇子(天武天皇)はこの地に籠もる。乱の最中、皇子がこの地に籠もっていたのは吉野が神霊の加護を得るにふさわしい土地であったからであろう。続く持統天皇は在位の間だけでも三十一回もの行幸があつた。持統朝以降も天皇の行幸は続き藤原不比・菅原道真・藤原道長ら要人も訪れている。平安時代に入ると金峯山寺を中心とした山岳信仰が流行る。兄頼朝に追われた義経は一時吉野に身を寄せた。鎌倉幕府の圧力がおよび義経は吉野を落ち延びるが、静御前はこの地で捕われの身となる。義経・静の悲劇は後世『吉野静』『一人静』『義経千本桜』などの芸能となり判官びいきの涙を誘う。鎌倉時代末期、後醍醐天皇に従う楠木正成に呼応して金峯山寺僧兵は鎌倉方と戦うが敗北する。南北朝時代、後醍醐帝遷都により吉野は南朝の拠点となる。以降、後村上・長慶・後龜山天皇と南朝は続くが天皇を交互に両朝から出す条件で両朝和睦。この合意で後龜山天皇は大覚寺に移る。しかし、約束は破られ後龜山天皇は再び吉野に帰る。これを後南朝という。後南朝の勢力は非力ではあるがしばらくは存続する。応仁の乱が始まると後南朝は西軍の一勢力に留まり消滅していく。応仁二年(1468)蓮如がこの地を訪れ願行寺・本善寺など一向宗の寺院を建てたことも吉野の歴史に付け加えるべきであろう。文禄三年(1594)、豊臣秀吉はこの地で盛大な花見をした。伴は秀次・家康・利家などの顔ぶれであつた。古典文学の世界でも吉野は重要な地である。『万葉集』には持統天皇に随伴した柿本人麻呂・高市連黒人などの秀歌が残る。ちなみに先載の天武天皇の歌は吉野の地名の源を伝えている。和歌のみならず『懐風藻』にも吉野は神仙境として題材になっている。その数は全百二十編の漢詩のうち明らかに吉野を歌ったものだけでも十六編に及ぶ。先載のように、『莊子』にいう藐姑射はこやの山に対比させたり、桃源郷に模した表現も見られる。吉野の景物は『古今集』の時代は雪・山・川・山吹・藤・滝・桜などさまざまである。中でも桜が吉野の景物を代表するようになったのは平安時代後期からの傾向で、この地に庵をむすんだ西行の秀歌がそれを決定づける。そもそも吉野の桜は蔵王権現の神木とされ、多くの寄進により植樹が繰り返されてきた。その桜は嵐山など各地に移植され、吉野の代表的景物として桜は不動のものとなった。吉野を舞台とした謡曲に『吉野天人』『国栖』

『吉野静』『二人静』『忠信』がある。この地と茶の湯との関わりを示すものとして〈金林寺茶器〉が名高い。金輪寺茶器は蔦を材とする茶器の中でことに世に知られている。後醍醐帝が吉野金輪寺にて一字金輪の法を修めたとき好まれたものと伝えられ、経筒の形に似ている。吉野塗はこの地の漆芸で盆・椀などがある。特に朱で花卉枝葉文様などを描いたものを吉野絵という。吉野塗の茶道具としては金輪寺茶器のほか香合などが見られる。この地の特産品として知られる葛粉は上質で知られ和菓子材料となる。

【よなが】夜長 ヨナガ

① 夜が長い季節。日暮れが早く暁が遅くなった夜。

季 ①秋

同・夜永

連・夜学・砧

漢・夜の砧を聞く 白居易

誰が家の思婦か秋に帛を擣つ 月苦え風凄じくして砧杵悲し 八月九月  
正に長き夜 千声万声了る時無し 応に天明に到らば頭 尽く白かるべし  
一声添へ得たり一茎の糸

・ 秋夜

秋の夜長し 夜長くして眠ることなければ天も明けず 耿耿たる残んの燈  
の壁に背けたる影 蕭々たる暗き雨の窓を打つ声 上陽人白

『和漢朗詠集』より

文・耳かしがましかりし砧の音おぼし出づるさへ恋しくて、まさに長き夜、と  
うちずんじて臥し給へり。 『源氏物語』夕顔より

・このごろは夜ながにしめやかにて、夜聞かん。 な子守罷でそ…

『宇津保物語』蔵開中より

曲・君が命は長き夜の 月にはとても寝られぬにいざいざ衣打たうよ

『砧』より

歌・二葉にてめざしし篠の秋くればよなかなになりて寝ざめがちなる

『好忠集』より

句・秋あいつらも夜長なるべしそゝり唄

小林一茶

例\* ≪二重切竹花入≫ 利休作大名物。天正十八年(1590)秀吉の小田原城攻めの際、陣中見舞として利休は供奉したが、途中葦山の竹で作った花入のひとつ。藤田美術館蔵。

補 一年中で一番夜が長いのは冬至であるが季語は変わり目で詠むことが多く、「夜長」は夜が長くなってきた秋をいう。「夜学」は夜の勉強をいうが、茶人にとつては夜学の蓋置を想う。火灯窓形の透しの主に鉄か磁器でできた蓋置。本来この上に瓦皿を乗せ油と灯心を入れて灯火とする照明器具。この瓦皿受けを見立てて蓋置とする。夜長を表現する秋の茶道具。利休好、二重切竹花入は竹の節を「よ」といい節の間隔が長いため〈夜長〉の銘が付いた。現代では二重切竹花入は花を下段に入れるのが約束だが元は花所望の際、上段には客が入れたのではないだろうか。寸切竹花入〈尺八〉、一重切竹花入〈園城寺〉も同様に小田原城攻め陣中見舞として利休が葦山の竹で作ったといわれている。先載の漢詩の上陽人じやうやうじんは玄宗皇帝の後宮の一人。楊貴妃の存在により退き、上陽宮に幽居させられ生涯を終えた人。

【よろぼし】弱法師 ヨロボシ

① よろよると歩く法師や弱弱しく歩く乞食をいう。

② 能の曲名。観世元雅作。四番目物。特殊物。撰津国四天王寺を舞台とする。「ヨロボウシ」ともいう。河内国の高安通俊は他人の讒言により息子の俊徳丸を追放する。しかし時を経て後悔し、天王寺で俊徳丸のために七日間の施行をおこなう。施行の最終日に当たる彼岸の中日、弱法師と呼ばれる盲目の乞食が天王寺に現れる。通俊は施して言葉を交わす。弱法師は乞食ながら梅の香に心を通わす青年で、天王寺の縁起を説く曲舞を謡う。この弱法師こそ我が子俊徳丸と気付いた通俊は人目をはばかり、夜になって父と名乗り郷里へ連れ立って帰る。面は弱法師。

季 ①無季 ②春

類・鉢開

連・四天王寺・梅

曲・これなる木陰の梅の花が 弱法師が袂に散り掛かるぞとよ あらうたてのお言葉や 所は難波津の梅ならば ただこの花とこそ仰せあるべけれ 今は春

への半ばぞかし 梅花を折つて頭に挿まざれども 二月の雪は衣に落つあ  
ら面白の匂ひやな

『弱法師』より

例\*宗旦作竹茶杓。細身の本樋。

補 東京国立博物館には下村観山筆屏風仕立の〈弱法師〉がある。貧相な盲人ながら梅の香に感じ入る優雅な心の法師が見事に描かれている。謡曲には物語の背後を彩る景物があるが、『三井寺』が月、『道成寺』が桜ならば『弱法師』は梅であろう。梅を景物とする曲はこのほか『箴』『梅』『東北』『老松』『胡蝶』『難波』などがある。

【わかな】 若菜 ワカナ

- ① 春先に萌える菜。摘んで食用とする。
- ② 新年の祝儀に用いる菜。宮中で正月初の子の日、七日の白馬の節会に食し邪気を祓う習わしがあつた。延喜年間内膳司が若菜七種を羹あつものに仕立て天皇に奉ることが年中行事として正式に定まった。食して邪気を祓う意味がある。
- ③ 正月七草粥に入れる野菜。②が民間に伝わったもの。
- ④ 紫式部『源氏物語』巻三十四・三十五の巻名。上下二巻にわたる。上巻は光源氏三十九歳から四十一歳春まで。下巻は光源氏四十一歳春から四十七歳年末まで。病の朱雀院は出家を決意し、愛娘女三の宮を源氏に降嫁させた。そのため紫の上は心を痛め、源氏との間に心の溝ができる。太政大臣家の長男、柏木は六条院の蹴鞠の折り、女三の宮をかいま見、心を熱くする。源氏四十七歳の春、六条院の女君を集め女楽を催す。その夜、紫の上は急に病に倒れ二条院に移される。紫の上には六条御息所の怨霊がとり憑き危篤に陥る。紫の上のいない六条院では柏木が女三の宮と密会する。
- ⑤ 狂言の曲名。女狂言。ある果報者が仲間を連れて野辺へ遊びに出る。そこへ大原女たちが通りかかる。果報者は心引かれて女たちを呼び止め酒盛をする。かわるがわる謡い舞い夕暮れとともになごり惜しみながら別れる。

季 ①②③⑤春

同・七草

類・若菜摘み・若菜の節会

連・子日ねのび・求塚(堀川百首)・二人静・乙女・若草

漢・若菜 わか菜

野中に菜を茗ぶ やちゅう さい えら 世事これを蕙心に推す せじ これを けいしん に お

鑪下に羹を和す ろか あつもの くわ 俗人これを羹指に属す しやくじん これを けいしゆ に ぞくす 菅 くわん 『和漢朗詠集』より

文・七日の日の若菜を、六日人の持て来さわぎ、とり散らしなどするに、見も知らぬ草を子どもの取り持て来たるを、「なにとかこれをばいふ」と問へば、とみにもいはず、「いさ」など、これかれ見あはせて、「耳無草となむいふ」といふ者のあれば、「むべなりけり、聞かぬかほなるは」と笑ふに、またいとをかしげなる菊の、生ひ出でたるを持て来たれば、

つめどなほ耳無草こそあはれなれあまたしあればきくもありけり

といはまほしけれど、またこれを聞き入るべうもあらず。

『枕草子』百二十六より

・正月廿三日、子の日なるに、左大将殿の北方、若菜まいり給。かねてけしきも漏らし給はで、いといたく忍びておぼしまうけたりければ、にはかにて、え諫めかへしきこえ給はず。

『源氏物語』若菜上より

歌・籠もよみ籠持ち ふくしもよみぶくし持ち この岡に 菜摘ます児 家聞かな 名告らさね そらみつ 大和の国はおしなべて 我こそ居れ しきなべて 我こそいませ 我こそば 告らめ 家をも名をも

『万葉集』雄略天皇

・君がため春の野に出でて若菜摘むわが衣手に雪は降りつつ

『古今集』光孝天皇

例\*片桐石州作共筒茶杓。藪内竹翁銘。香雪美術館蔵。

補 菜とは草の中で食用にするものをいう。正月七日に七草を羹あつもの(吸物・粥)に仕立てて食する風習は、『荊楚歳時記』に「正月七日を人日と為す。七種の菜を以つて羹を為る。」とあることから中国の影響によるものである。わが国では古くから宮中の年中行事として上子の日ねに七草粥を奉った。「ねのび」の音から「根延び」につくり、長寿、さらには邪気を祓う意味に結びつけたものであろう。春の七草は芹・薺・御形・はこべら・仏の座・すずな・すずしろであるが他にも異説がある。近世、正月十五日に食する七草粥と混同されるが、起源は七日の羹と別の行事である。古代の若菜摘みは春の植物の

生命力にあやかろうとする行事で、若い女性が摘み手であった。先載の万葉歌はその様を見に行幸した天皇の歌である。

【わかみづ】若水ワカミズ

① 立春の早朝に主水司ちみづのつかさが新しい水を汲み清涼殿朝餉あさぐれいの間で天皇に奉げる水。一年間の邪気を祓う意味のある宮中年中行事。

② 各家で年の初めに汲む水。儀式的な意味が強く、特に茶家では家長自らが汲む。未明の寅の刻に汲むのが正式。

③ 若水を広義に捉え、新年に限らず井華水せいかにすいと同義に、鳥の渡らぬ暁に汲む水。さらに広義に朝最初に汲む水を若水・井華水ということもある。

季 ①立春 ②元旦 ③無季

同・井華水

連・大福茶・東雲

文・惣じて、朝昼夜ともに、茶の水は暁汲たるを用る也。これ茶の湯者の心がけにて、暁より夜までの茶の水、絶ぬやうに用意すること也。夜会にてひる已後の水不用之。晚景半夜までは陰分にて、水気沈みて毒あり、暁の水は陽分の初にて清気うかぶ。井華水也。『南方録』より

・一当日の暁、新に水を汲み、釜へ七八分目入れて仕懸、水屋瓶・水指・水次、皆々水を改め入、是を井華水と云。

井伊直弼『茶の湯一会集』より

補 『栄花物語』には章子内親王が誕生して初の正月(永延二 988)、「若水をして、御湯殿参る」と赤子の風呂湯に若水を用いた例が見える。邪気を祓う願いが込められていたと思われる。先載『南方録』にあるように茶の水は井華水、すなわち未明寅の刻までに汲んだ水がよいとされた。夕方から夜半までの水は陰で清気がない。鳥の渡らぬ暁方の水は陽の気のはじまりであり最も清気があると理解されたのである。村田珠光の弟子、松本珠報がある夜、茶のための水を汲みに行ったが夜が明け始め、人目を恥じて桶を投げ出し逃げ帰ったという逸話がある(『山州名跡志』)。彼の行動は、秘密の名水の人に知られたくないためという説もあるが、茶の湯には井華水を用いることが正式であり、明けて水を汲む姿は茶人の恥と思つたためと理解したい。ま

た、狂言『清水』には茶会の為の水汲み仕事を嫌がる太郎冠者の姿が描かれている。水汲みは未明からの苦労であったことが背景にあったのであろう。唐時代の陸羽の著した『茶経』によれば山水、川水、井戸水の順に良水とされている。日本では主に井戸水が用いられ、名水を湛える井戸には固有名詞がつけられた。京都六条にあった「醒ヶ井」は珠光・紹鷗・利休らが用いた井戸として名が残る。大福茶とは茶家で家長(家元)が正月、若水を汲み祖先に供茶をし、家族や内々の者に立てる茶。茶家に限らず元旦に家長、あるいは年男が朝一番の水を汲む習わしのある地域もある。

【わしのやま】 鷲の山 ワシノヤマ

① 霊鷲山りやうじゆせんのこと。古代インドのマガダ国の首都王舎城の東北にある山。釈迦が説法をしたところとして知られる。

② 比叡山の別称。

③ 京都音羽山(清水山)の北、高台寺の南東にある山。当地にある正法寺の山号霊鷲山にその名を残す。

季 ①②③無季

同・霊鷲山・鷲御山・鷲峰山

類・比叡山

連・法華経・説法

経・このように、私は聴いた。あるとき、世尊はラージャグリハ(王舎城)のグリドウラークータ(霊鷲山)に滞在して、千二百の僧と一緒にいた。これらの僧はすべて阿羅漢で、汚れもなければ、欲望のわずらいもなく、自己に充ち、心も理智も巧みに迷いを離れており、高貴の家の生まれで、偉大な象であった。 『法華経』(岩波文庫)より

文・鷲の峰に思ひあらはれ、鶴の林に声たえにしよりこのかた迦葉かせふが詞を鐘の音につたへ、阿難あなん身を銚かぎの穴よりいれり。 『三宝絵詞』より

曲・仏ももとは捨てし世のなかばは雲に上見えぬ鷲の御山の名を残す

『熊野』より

歌・鷲の山へだつる雲や深からんつねにすむなる月を見ぬかな

『後拾遺集』康資王母

・瑠璃の経巻は靈鷲山の暁の空よりも緑なり

『梁塵秘抄』

補 靈鷲山りやうじゆせんのサンスクリクト語原典をカタカナで表記するとグリドウラーク  
ータとなり、漢訳経では音写して「耆闍崛山」の字が当てられ靈鷲山と訳さ  
れている。名の由来について鷲が生息しているからとも、山が鷲の形をして  
いるからとも伝えられる。『法華経』『無量寿経』をはじめ、ここでの釈迦の  
説法伝説によりなる経は数多いが勿論後世仮託である。しかし、靈鷲山とさ  
れる山はインド北東部ガンジス川領域、当時インド最強の国といわれたマガ  
ダ国の首都王舎城跡の東北に実際にあり、かの法頭も玄奘も訪れている。玉  
虫厨子宮殿部背面には日本に現存する日本最古の〈靈鷲山図〉が見られる。  
極めて古い様式で山頂が三方に別れ、麓が細い点などは中国古代の崑崙山の  
姿に源流がある。【こんろん】崑崙 参照。金剛峯寺蔵(美福門院願経)(中尊  
寺経)、神護寺蔵(神護寺経)などの紺紙金字一切経、慈光寺蔵(慈光寺経)法  
華経などには見返に釈迦説法図が描かれ、釈迦の背後に鷲の形をした山が描  
かれている。靈鷲山にての釈迦説法図である。平安時代後期から鎌倉時代の  
作。先載『熊野』は③の京都東山にある山のこと。

【るづつ】井筒 イッツ

① 井戸の地上の部分の井形の囲い。

② 『伊勢物語』二十三通称「筒井筒」のこと。

③ 能の曲名。世阿弥作。三番目物。本鬘物。右記の『伊勢物語』を典拠とす  
る。旅の僧が在原寺で古塚(業平の墓)に水を手向ける若い女を見かける。女  
は業平と井筒の女との恋物語を話し、自分がその女の霊だと告げ井筒の陰に  
消える。夜、女は業平の形見の装束を見にまとい井戸に姿を映して業平の面  
影を偲び舞う。面はシテⅡ増 若女 小面。

季 ①無季 ②③秋

連・たけくらべ・すすき

文・むかし、あなかわたらひしける人の子ども、井のもとにいでて遊びけるを  
おとなになりければ、男も女もはぢかはしてありけれど、男はこの女を  
こそ得めと思ふ。女はこの男をと思ひつつ、親のあはすれども聞かでない  
ありける。さて、このとなりの男のもとより、かくなむ、

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに  
女、返し、

くらべこしふりわけ髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあぐべき  
などいひいひて、つひに本意のごとくあひにけり。

『伊勢物語』二十三より

曲・われ筒井筒のむかしより 真弓槻弓年つきゆみを経て 今は亡き世になりひらの形  
見の直衣身に触れて 恥づかしや 昔男に移り舞 雪を廻らす花の袖

『井筒』より

歌・つつるづつ五つにわれし井戸茶碗とがをばおれが負ひにけらしな

『新撰狂歌集』細川幽斎

例\* 《筒井筒》重要文化財井戸茶碗。高麗茶碗の中でも屈指の名品。秀吉の所持であったが、何某かの粗相で割れてしまったところ、機知に富む細川幽斎の右記狂歌で秀吉の機嫌を直しお手打ちを免れたと伝えられる（『長闇堂記』）。この逸話から狂歌に因み銘となる。

補「つつるづつ…」の狂歌は他にも「かけし」「とがをばたれか」「とがおぼ我に」などつくる異本がある。茶碗を割ったのは秀吉の小姓、あるいは幽斎自身とする伝えがある。割れを接いだ茶碗はこの他重要文化財「馬蝗絆ばこうはん」が知られている。青磁を接いだ銚を大形の蝗いむ（馬蝗）に見立てての銘である。他の茶碗に「家継（つぐ）」・「灌川（瀬をはやみ）」・「悪太郎（生傷が絶えない）」・「愚息（後つだらけ）」・「東海道（五十三つぎ）」・「駿馬（よくかける）」・「砧（音がひびく）」・「響（ぎ）」・「十文字（接ぎ跡の形）」・「十六夜（少し欠けている）」・「岩うつ波（くだけてものを思ふころかな）」などがある。いずれも陶磁器の接ぎというネガティブな様を逆手にとった面白い銘が多い。

【あぐば】 笑凹 𪛗 笑窪 エクボ

① 笑うと生じる頬の窪み。

季 ①無季

連・笑顔・福笑い

歌・あぐばるし人のおもかげ身にそひてひとりあぐのみせられぬるかな

『拾玉集』慈円

例\*玄々斎好菓子。\*《鬚手》瀬戸茶入手分けのひとつ。胴に凹みがある。

補 右記瀬と茶入のほか、茶碗の胴部を意図的にへこませた意匠を笑凹という。御本茶碗や各国焼茶碗に見られる。

【をぐらやま】小倉山 オグラヤマ

① 京都市右京区の西端、標高二八三・七mの山。嵯峨野の西にあたり、南側麓を保津川が流れる。紅葉の名所として知られている。同名でよばれる山が奈良にもがあり『万葉集』に詠まれている。いずれの山も鹿を景物として詠まれることが多い。

② オグラの音より「小暗し」の意を掛け暗いものたとえ。

季 ①②無季

同・小暗山・雄蔵山・小椋山

連・紅葉・鹿

文・山はをぐら山。かせ山。三笠山。このくれ山。いりたちの山。わすれずの山。すゑの松山。かたさり山こそ、いかならんとをかしけれ。

『枕草子』十一より

歌・夕されば小倉の山に鳴く鹿は今宵は鳴かずい寝にけらしも

『万葉集』舒明天皇

・夕月夜をぐらの山に鳴く鹿の声のうちにや秋は暮るらむ

『古今集』紀貫之

・小倉山麓の里に木の葉散れば梢に晴るる月を見るかな

『新古今集』西行

・置く露の光をだにもやどさまし小倉の山にて何もとめけむ

『竹取物語』かぐや姫

例 \*玉子手の高麗茶碗。松屋常慶、桂九兵衛、家原自仙、岩崎小弥太と渡り、現在静嘉堂文庫蔵。\*《雄蔵山》井戸茶碗。藤田美術館蔵。

補 平安時代より都から程よく離れた嵯峨の一带は貴族たちの別荘地として好まれた。小倉山もその中に含まれる。文人として名高い醍醐天皇の皇子兼明親王も政治的失脚の末「雄蔵殿」と称する山荘を当地に営んだ。鎌倉時

代、小倉山には藤原定家の別荘小倉山荘があった。『小倉百人一首』はここで撰したと伝えられるために付いた名である。『明月記』嘉禎元年五月二十七日の条によれば、定家は息子為家の舅、宇都宮の藤原頼綱の切なる要望により、嵯峨中院の頼綱の山荘の障子のために自ら染筆した「天智天皇より以来、家隆、雅経に及ぶ」「古来の人の歌、各一首」を贈った。この色紙は、後に〈小倉山荘色紙和歌〉、通称〈小倉色紙〉と呼ばれ、武野紹鷗によって茶掛に取り上げられ、和歌・茶の湯融合の先駆となる。以降、茶掛の高峰に位置し続ける。ちなみに、紹鷗は「天の原……」の歌を好み、和漢の境と評したという。大和国十市郡（現在の桜井市か）にも同名の山があり、先載『竹取物語』の「小倉の山」は奈良の山。②の意味より夜咄に使われることが多い銘である。近代より人々は明るさに心を奪われ、「暗い」は負のイメージで捉えているように思われる。しかし古来、神殿も床間も暗く、「暗い」は無尽蔵の世界、神聖な世界であった。

【をはらめ】小原女 オハラメ

① 京都洛北の大原産の黒木、柴、炭などを頭に乘せ市中へ売りに来る女。

季 ①無季

同・大原女・小原木売

連・小原木・大原・建礼門院

文・「この辺の女はみんな綺麗だな。感心だ。何だか画のようだ」と宗近君が云ふ。「あれが小原女なんだらう」  
夏目漱石『虞美人草』より

狂・やせおはらの女どもが、いちやうに、出立て、わかなをつみ、おはらぎうりに出るを御らふじられひ  
『若菜』より

歌・かこたるゝ身の程ならば小原木のふすべらるゝも嬉しからまし

『七十一番職人歌合』より

・大原は比良のたかねの近ければ雪ふる程を思ひこそやれ

『山家集』西行

例\*瀬戸黒茶碗。桃山時代の作。宗旦命銘。〈小原木〉と並んで瀬戸黒茶碗の双壁。

**補** 小原女は紺衣に御所染の帯、白手甲、脚絆、頭に白布を巻き赤い前だれして黒木を頂くという出で立ちが独特で人気となった。先載『七十一番職人歌合』にはその姿が挿してある。近年になっても日本画の画題として描き続けられ土田麦僊、富田溪仙、横山大観、前田青邨らの作品が知られる。謝野晶子が「ほととぎす治承寿永の御国母三十にして経よます寺」と詠んだのは当所寂光院で余生を過ごした建礼門院徳子のことである。小原女は建礼門院の侍女阿波内侍がモデルという伝承が残っているが根拠はない。狂言『木六駄』にある「木買せ、木買せ、小原木召せや黒木召せ」が当時の売り声だったという。